

基督論

70  
216

020589-000-7

70-216

基督論 附録, 三位一体の説

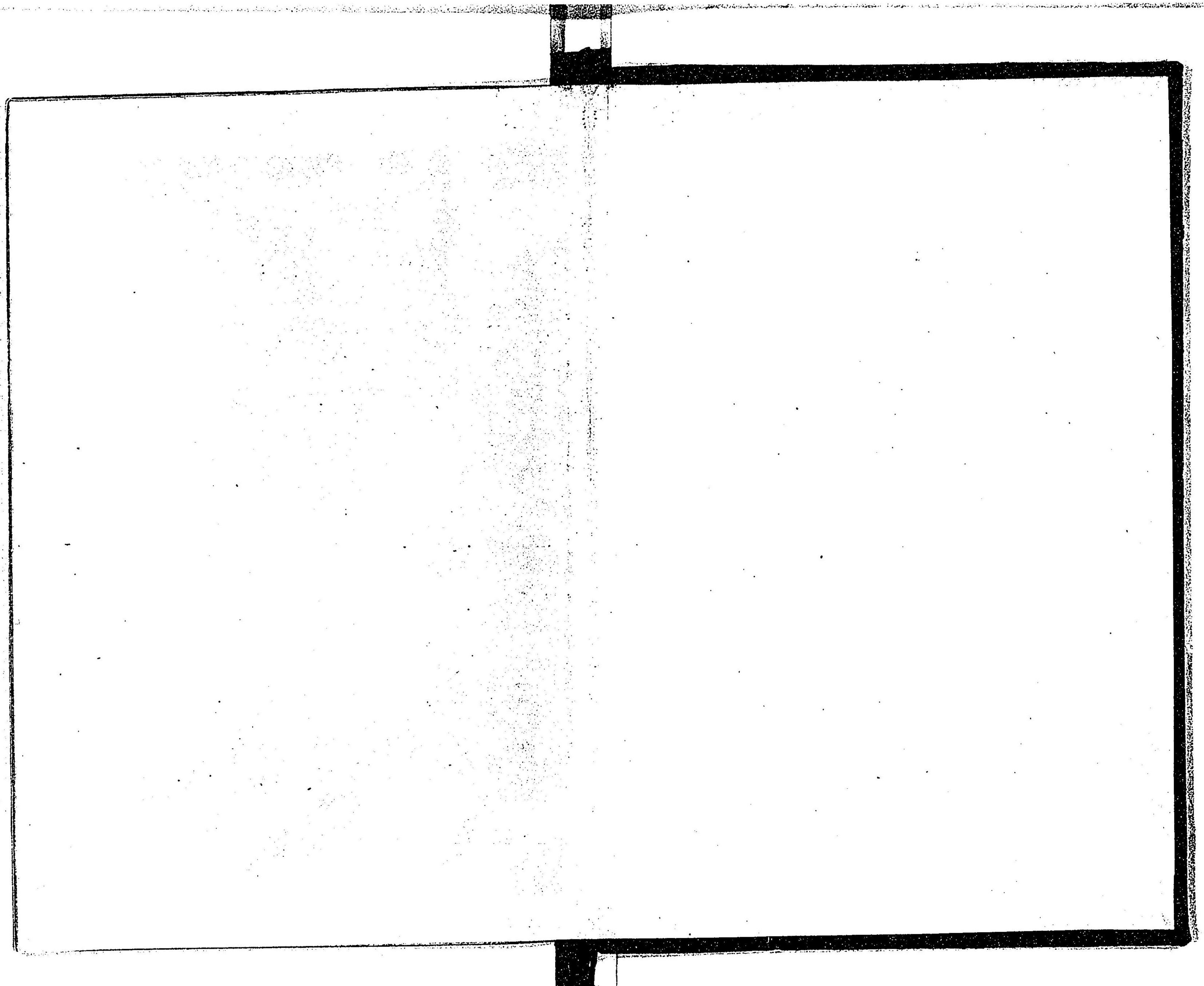
小崎 弘道/著

M26

ABI-0404



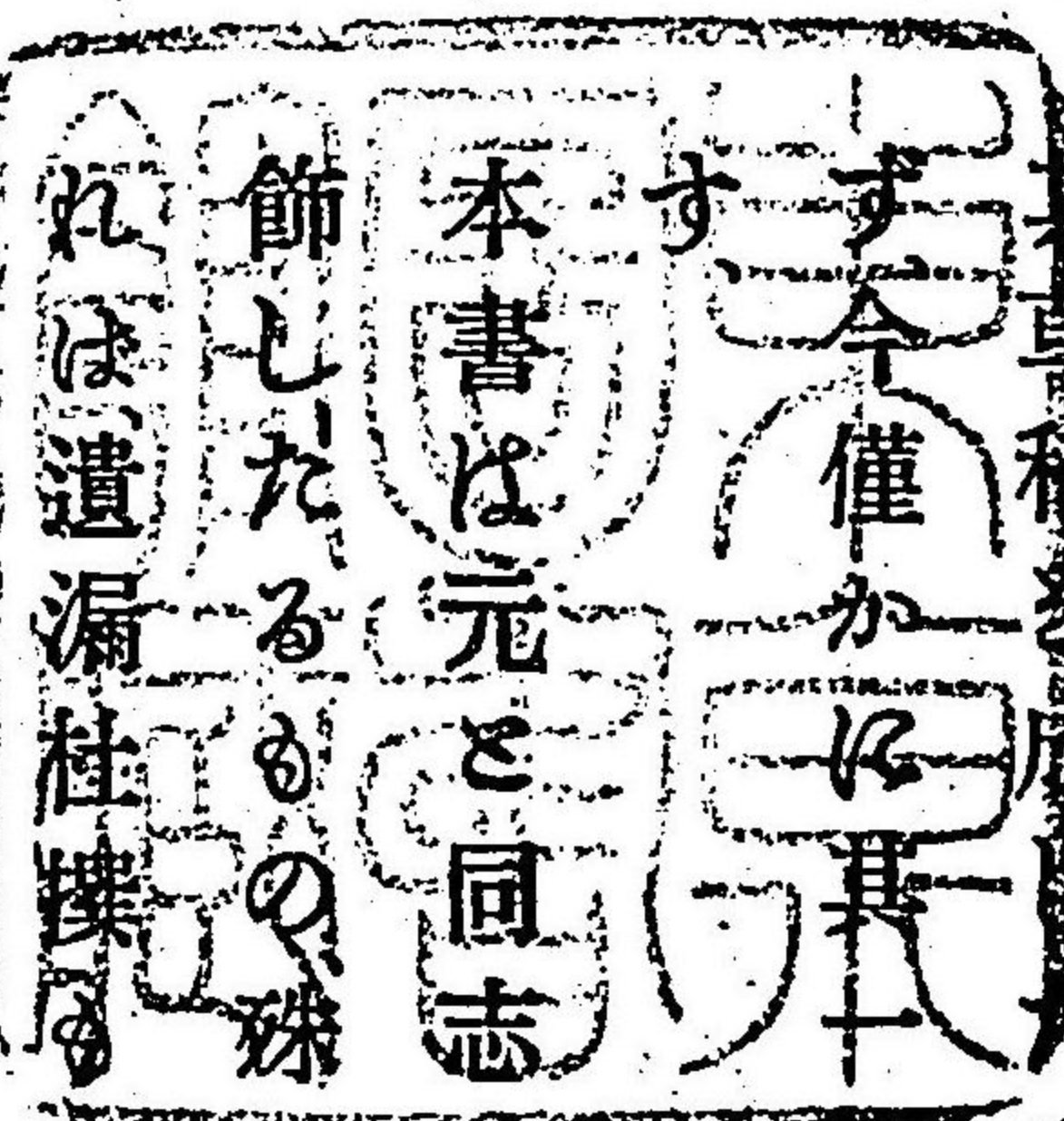




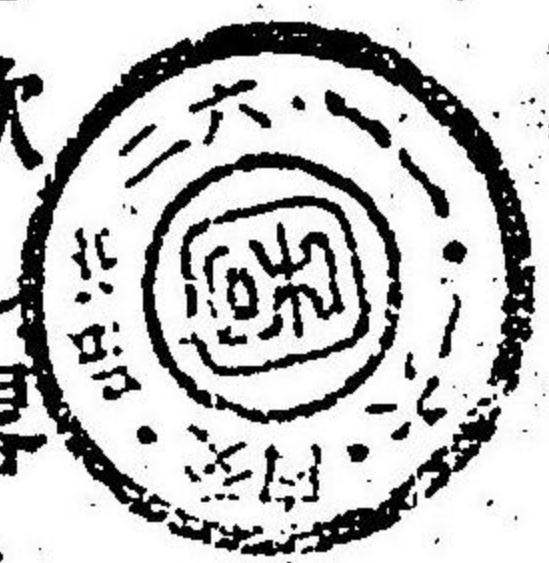


基督論序

余は今回渡米前神學一班なる書を著さんと欲し畧く  
其草稿を成したるも、世務繁劇遂に之れを果たす能は  
ず今僅かに其一部なる基督論のみを世に公にせんと



本書は元と同志社神學生徒に講述せしものを布延修  
飾したるもの殊に出發前草創の際に起草せしものな  
れは遺漏杜撰も少からざるを覺ゆ引用書の如きドル  
チル、ブルウス、リットン、フェールベルン等の著書に負  
ふ所少からず又之を印行するに於ては、杉山重義君專





ら校正の勞を取られたれば同君に謝せざるを得ず、  
此書小冊子なりと雖も、若し萬一にも我國基督教の進  
歩に於て裨補する所あらば、著者の幸何をか之に加へ  
ん、

明治廿六年八月下旬

渡米の途端東京に於て

小崎弘道識

目次

目	次
第一章 基督論畧史	第一頁
第二章 近世の基督論	第十四頁
第三章 使徒の基督論	第二十六頁
第四章 自己に關する基督の思想	第四十六頁
第五章 基督の事業	第六十六頁
第六章 基督の品性及び宗教	第七十八頁
第七章 基督の禮拜	第八十六頁
第八章 基督の復活	第九十四頁
附 錄 三位一體の説	



# 基督論

小崎弘道著

## 第一章 基督論畧史



キリストがカオザリヤ、ピリピの邊に於て、弟子等に尋ね給ひし問は、尙ほ教會に於ける今日の大問題なり、人々は人の子を誰といふや、太十六の十三此問題は、宙に神學上の問題のみに非らず、實に實際上至要の問題たり、キリスト教の興敗は之か答案如何に歸すると云ふも可なり、神學の問題は實際の信仰に關係なしと稱ふる者少からずと雖も、實際は大は然らざるを見る、成程ある一種の問題は之に關係少きも、キリストの性質如何に關する問題は、信仰に大なる關係あるや明なり、故にヨハナは其書翰に於て如此く云へり、凡そイエス、キリストの肉躰となりて



(2)

臨り給ることを認はず靈は神より出づ、これに由て神の靈を知るへし、凡そイエス、キリストを認はさざる靈は神より出づるに非らず、即ちキリストに敵する者の靈なり、此者の將に來らんとするとは爾曹が聞ける處なり、今既に世に居れり、(約一書四〇二二三) ヨハ子ほど實際の宗教を重むたるものはあらず、然れども亦た彼ほどに教理の純潔を保たんと務めたるものはあざざるなり、古今教會が此問題に答へたる所左の如し、

(一)キリストは純然たる人間也(Ebionism)

(二)キリストは純然たる神なり(Doketism)

(三)人に非らず神に非らず又た天使にあらず、一種高等の受造物なり

(Arianism)

(四)神人一躰の救主なり(God-man)

基督論

基督論

基督論

基督論

(3)

此外キリストに關する説多く、或は豫言者と云ひ或は全き人といひ或は聖人と云ふと雖ども要するに右の四種の外に出でざるなり、凡そキリスト教の教理を學ぶに於て、其歴史を研究するは極めて必要なり、特にキリスト論を然りとせず、蓋し古代よりの神學史は、過半キリスト論に屬すればなり、今之を略叙するに當り之を分て三期となすべし、

(一)キリスト降世より紀元三百八十一年に至る、(二)紀元三百八十一年より一千八百年来に至る、(三)紀元一千八百年来より今日に至る、

第一期、此期の主なる問題はキリストの性質論とす、之を論ずるに當り、最も必要なるは神と人間なり、此二の思想を明白に區別するに非ざれば、凡ての事明かならず、第一期の神の思想はユダヤ教の思想にして、所謂(Doism)一神教たるを免れず、即ち神は萬有の外に在りて、法則を以



(4)

論 督 基

て天地萬有を支配し給ふと爲し、他方に於ては異教の神の思想なり、此思想は凡神教と多神教の混合なり、而して多神教と凡神教は常に並行するものなり、此二者の思想共に神人の合致を許容せず、エダヤ教の之を許容せざるは、其神は高位に在す故に、下界の人間に合致し給ふとなしとするにあり、異教は多神教、凡神教なるが故、神人を混同す、混同と合致とは相容る可きものに非ず、如此にしてキリストに關する思想の、此時代に公平に發達するは至て困難なり、此期に於て兩方の極端論を見る決して偶然に非ざるなり、

(甲)は「エヒオニズム」にして、キリストを以て人と爲すの説なり、此説を主張する人を「エヒオニスト」といふ、希伯來語にて貧賤の義なり、何故如此き意義の字の用ひらるゝ乎、當時此説を持つる人はエダヤ教の人々にして、其人々は至て貧賤なりしが、是に由て其語を引用して此説を表す

(5)

論 督 基

るに至れりと云ふ、之れに二種あり、(一)エダヤ人の「エヒオニズム」にして、キリストを以て一の豫言者と爲すの説、(二)ギリシヤ人の「エヒオニズム」にして、キリストを以て大人物となすの説、孰れも多少當時に行はれた

り、  
(乙)ドケチズム、即ちキリストを以て純然たる神と爲すの説、之に三種あり、(一)顯現説シノプティにして、キリストを以て神自から人の像を取りて、一時世に顯はれたりと爲すの説なり、此説はエダヤ人の信者の間に多く行はれたり、恰も舊約時代、神天使となりてアブラハム等に現はれ給ひし如くにして、舊約に於ては一時なりしが、キリストは卅三年の間現はれ給ひたり、マリアの胎をかりて此世に生れし如きも、實際如此き事ありしにあらず、斯く人に見せ給ひしものにして、キリストの肉躰は人間の肉躰とは異れりとなす、(二)は「ノスチック」のキリスト説にして、キリストは實



(6)

躰の肉躰を有せしにあらざ、其肉躰は空なり虚なり、唯だ吾人に肉躰と見ゆるのみなりとせり、

「ノスチツク」は希臘語の(ノス)即ち智識を意味し、世の俗人の信仰に對し、智識を有すといふより起りしなり、此宗派の一の思想は——佛教或は他の教、孰れ東洋より入りたるもの——肉躰は下等にして、靈躰は高尚なり、肉躰ある以上は罪は免かれず、故にキリスト若し肉躰なりせば、罪人の仲間入をせざる可らず、故にキリストの肉躰は空なりといふに在り、肉躰と罪とに關しては、今日の信者にも稍此に似たる思想を有するものあり、是れ「ノスチツク」的思想と云はざる可らず、(三) Apollinarism はアポリナリアスの主唱せし處にして、キリストの肉躰は人なれども、靈魂は「ロゴス」即ち神なりといふに在り、此説は昔時隨分多くの人に採用せられたり、而して奇なる哉、今日日本の信徒中此説を取るもの頗る多し

基督論

基

督

論

(7)

とす、此説の困難は則ち聖書に符合せざる點少からず、聖書に神の人となり給へると、又たイエスは凡の事人の如くありたれども罪を犯さざりしとを記せり、肉躰を取りたるのみにては、未だ以て人となりたりといふ可らず、已に人といへば靈魂も亦た人の靈魂を取らざる可らず、故に此説は當時の大議論となり、三百八十一年ユンスタントノブルの大會に於て異端とし排斥せられキリストは神人兩性ありと決せり、(丙)當時にありて、頗る勢力ありしは「アリアニズム」にして、キリストは人にあらざ神に非ず一種高等の受造物なりとの説なり、此説元とアリアスといふ人より起れり、彼考へらく、キリストは人にあらざ預言者以上なれども、神とすべきか、神は肉躰を取りて來るべき筈なし、殊にキリストの言に「我父は我より大なり」(約十四〇二八)とあるを見れば、彼は神より卑きものにして、神にあらざるや明かなりとせり、



(8)

此説は當時廣く教會に行はれ、一時殆んど他説を壓倒せんとするに至りし時、ニカヤ(三百廿五年)の大會あり、アマチシアスなる大神學者起り、此會議に於て之を異端なりと排斥し、教會の擯斥する所となれり、後復たコンスタンチノール(東羅馬)の帝王にして、之を取る者ありしが、一時のみにして倒れたり(五世紀の頃)

アリアス(二百五十六年より三百卅六年)はアンテオケ教會の長老にして、前述の説を唱へたるに因り、ニカヤの大會議の決議により教會より放逐せられ、其身は遠方に流罪に處せらる、然れども其後コンスタンチン大帝の時、招を受け再び教會に入るの大禮あり、之に列せんとするの途次變死せり、アリアン派の者は、嫌惡者の毒手に罹れりと云ひ、正統派にては天罰を受けたりとなせり、

第二期 此時代は學者キリストの兩性合致を計たるの時にして、種々

論 督 基

論 督 基

(9)

の議論あれども、多くは無益の論説のみなり、コンスタンチノール大會に於て、キリストの兩性は之を認定したれども、此兩性が如何にして合するかは困難の問題なりし、之が至難の問題たる、今日も尙ほ之を解説するに能はざるを見て知るべし、則ち兩性あれば神人二者とならば、はなきや、其二者如何にして合するか、或は又た合するならば、已に兩性はなき筈ならずや、又た兩性にして一の「ペルソナ」を有するか、或は二の「ペルソナ」を有するか等の議論多くありたり、

最初に起りたるは Nestorianism にして、キリスト神人兩性の關係を以て、道德上の關係となし、人性を以て其基本と爲すの説なり、已に兩性道德上の關係にて相合するとすれば、何れか之が基本たらざるべからず、此説は人性を以て基本と定めたり、則ち人間に於て神の靈の働くは間斷あるも、キリストに於ては、神の靈間斷なく働き、且つ常に其中に在り、故



(10)

にキリストは完全なる人にして、其神性とは神の靈を十分に受けたるに在りとせり、

テストアリスは四百八十九年に死せし人にして、元とアンタオク教會の長老なりしが、後コンスタンチノープルの監督となれり、彼の性たる非常に嚴酷にして、自己の說に反對するものは、悉く異端として迫害し、盛に自身の說を主唱せり、當時専ら彼に反對せしは Origen なり

シリルはアフリカの監督にして、テストリアスの說は正統にあらずとし、爭論を始め、共に當時の法王に訴へて、互に彈劾をなせり、故に法王は止むを得ず、エペソに大會議(四百三十一年)を開きて、兩說の可否を判斷するに至れり、此大會に於てテストリアスは異端とせられ、シリルの論は遂に勝を制せり、然るにシリルの說も、初には神人兩性を唱へて、別に説明を要せざりしも、議論の餘、勢ひ之を説明せざるべからざるに至り、

論 督 基

基

督

論

(11)

神人一體の說より偏して Monophysism (一性說) となれり、然れども此兩性の一體を斗る上に於て、種々に變じて三說を生ぜり、(一)神性が人性に變じたりといふの說、(二)人性が神性に變じたりといふの說、(三)神人兩性混合せりといふの說、第一は、ロゴスが純然たる人間になりたりとなし、第二は、人性變化して神の性となり、キリストに人性あるも神性に悉く吸取せられたりとなし、第三によれば、人性神性一體なるを以て、或時は人となり或時は神となると説けり、然れども是等に於て尙ほ満足せず、四百五十一年 カルシトムの大會議に於て、凡て以前の說を排斥し、キリストは兩性あるも混したるにあらず、又滅したるにあらず、各自別々に存在して、一となりたるものなりといふに在るの、正統のキリスト說を立てたり、是れ爾來新舊教徒の今日迄正統として用ひ來れるものなり、左に カルシトムの信條中、キリストに關するもののみを譯出せん、



(12)

吾等は聖なる師父の迹を追ひ、凡て一致を以て我等の主なる一にして同じき子を教へ且つ信奉す、即ち神に於ても全く、人に於ても全く、眞に神にして又た眞に人、理性ある靈魂と肉體を有し、其神性に於ては父と同質、其人性に於ては吾等と同質、凡ての者に於て罪を除くの外、吾等に似、其神性に於ては、世の元始に於て父より生れ、其人性に於ては、後世に於て吾等の爲め、吾等の救の爲め、神の母なる處女マリアより生れ、混雜なく變化なく、分れなく分ちなく、二の性にて顯はれたる獨生の子なる、一にして同じきキリストを教へ且つ信奉す、其性質の區別は一致の爲に滅するにあらず、各自の性質は寧ろ一の「ペルソナ」の「ハイポタシス」に存せられ合せられて、一のもの、二の「ペルソナ」に離され、又は分たるゝにあらず、然れども一にして同じ獨生の子即ち神、道主、イエス、キリストなり、

論 督 基

基

督

論

(13)

此信條に依りて、キリストに關する教理殆んど一定し、其後中世に至りトマス、アクイナス等之に反對の説を出せしも、茲に論ずるの價值なし、其後ルイテラ、カルヴィン、ゾーリングルが聖晚餐の教理に就て争ふたも、是れ亦た茲に論究するの價值なきものなり、ルイテラは「コンサナスタンシエルの説にて、聖晚餐に就てキリストの靈が「パン」及び葡萄酒と共にあると云ひ、ゾーリングル、ガルヴィンはキリストの死を紀念する爲にして、「パン」及び葡萄酒に何の力もあるとなしとし、ルイテラ之に答へて、キリストは是れ我肉なりと云ひ給ひたれば、其肉ならざるべからずと主張せり、故に特別にキリストの肉が「パン」に依て存在するとすれば、キリストの性質に就て多少かわる所生ずる故に、キリストに關する論となるも、今爰に之を云ふの必要を見ず、

唯だ第二期に於て注意すべきは、<sup>Faustus Socinus</sup>がキリストに關する



(14)

論 督 基

一種の議論を立てし事あるのみ、Soeniusは一千五百三十九年に生れ一千六百四年に死す、其生地は伊太利にして其死地はポーランドなり、此人は曰くキリストは通常の人間にして、唯だ其吾人と異なる所は、道德宗教の高尙なる點に在りとす、此説を名けて「ソシニアニズム」と云ひ、此説を取るものを「ソシニアニスト」と云ふ、是を近世「ユニタリアン」派の濫觴といふも差支なし、ポーランドに於て同時貴族富豪の内に「ソシニアス」の説を取る者多くして、一種の教會を設立するに至れり、然れども「ソシニアス」の死後間もなく、政府は異端として之を禁じたるが爲め、此説を取る人或は獨乙或は和蘭に逃れて其説を主張せり、

## 第二章 近世の基督論

第三期に至て、所謂近世哲學なる者勃興し、爲に神學の思想も大なる影

基

督

論

(15)

響を受くるに至れり、中にもカント、ヘゲル、シユラエルマヘルの三人は此時期の神學思想に、最も大なる勢力を及ぼしたる人々なり、此時期に於て注意すべきは、キリストの人性を根本として、神人兩性の合致を計りたる事なり、

第一 キリストの人性のみを承認するの説、同く人性を承認するも、其間天壤の差違あり、其重なる者を擧ぐれば

(一)キリストを以て單に宗教上の英傑と爲すの説、レナン、ストラウス其他「ユニタリアン」の激派之を主唱す、日本に來りたるナツアの如きもキリストを以て宗教上の偉人 Religious Genius となせり、故に無論キリストの奇蹟の能力あるを否定し、又キリストを罪過なき者と承認せず、矢張キリストは吾人と同く罪あり過あり、通常一樣の人にして、唯だ宗教上の英傑たるのみ、則ち釋迦、マホメット、孔子と同一の者とせり、但し彼等の上に置



(16)

## 論 督 基

くとに於ては異論なし、キリストが過あり罪あるとを論ずるに如何なる事を云ふか、第一「パリサイ」の人に對して、餘り嚴酷に過ぎし事、又は宮殿に於て兩替をなし牛羊或は鳩等を賣る者を見て、之を逐出したるが如き、一朝の怒に乗じて粗暴なるとをなせりと非難し、其他彼の惡鬼を豕の群に入らしめしは、人の所有權を害するなり、又「エルサレム」に上るの途中、無花菓樹に菓なきを以て咀ひたるは、小兒の所爲と同じく、馬鹿らしき事なり等の言を以て非難せり、斯の如く非難する中にも其英傑たるとは之を承認せり。

(二)キリストを完全なる人と爲すの説　キリストの罪なき事は、常に其聖靈を受けて神と偕に在りし事を信ずれども、彼が人間以上の者たるとを信せず、彼等は曰くキリスト以前キリストの如き人なく、キリスト以後キリストの如き人なし、完全なる人間は初めてキリストに由て實

## 論 督 基

(17)

にせられたり、キリストに於て吾人完全なる人間の摸範を見、又たキリストに於て神の榮を見るときを得たり、此點に於てキリストは實に神と人との仲保、吾人の救主といふべきなり、米の「チャンニング」英の「マルチノ」の如き、「ユニテリアン」の一派之を主張す、又た獨乙に於ては「シユラエルマヘル」之を主張せり、シユラエルマヘルの説は一方に於ては、キリストの神性を認むるかと思へば、他方に於ては之を否定するが如き、或は一方に於てキリストの奇跡の或點迄を承認し、他方に於て或點は之を拒む、故に彼の説は分明ならざれども、強て區別する時は此第二類の中に加ふべきものなり。

(三)感情的自然説 (Sentimental Naturalism)　此説感情に於ては超自然的なるも、思想に於ては自然的なり、キリストを以て人間以上と爲せども、其實道理に於ては只だ其人性のみを承認す、有名なる獨乙の「エワルト」カ



(18)

イム、フイツザツクルの如き此説を主張す、カイルの如きキリストの復活に於て、他の説にては之を説明すると能はず、正に此事ありしに相違なもきも、其復活は肉の復活にあらずして、靈の復活なりと云ひ、其奇跡の如きも多くは自然法にて説明し、其解説の及ばざる處は、曖昧に附し去るが故に、ユニタリアン派の人々は、此等の説を以て自家撞着にして、終始一貫せずとなして、之を排斥するもの少からず、

(四)聖書の解釋上より完全説を主張する者、獨乙のバイシユラフの如き是なり、彼はキリストの奇跡及び復活も、道理にては分らざれども、聖書の解釋上、之を承知せざるべからずとの説を取り、キリストも解釋上より云へば到底通常の人に非らず、完全なる理想的人物なり、此點迄は分るも、キリストの性質如何は知るべからずと云ひて、更に之が説明を爲さず、

論 督 基

基

督

論

(19)

凡て此等の説に於ては、孰れも人と神との區別を僅少にし、之が一致を計らんとするものなり、ヘゲルの哲學及び凡神説に因れば、天地萬有は神の顯現にして即ち神なり、而して人間は其中最も高尚なるものなり、故に人性は所謂神性なり、「神の化身」Incarnationと云へる事は、獨りキリストのみにあらず、凡ての者皆神の性を有する者なるを以て、神人となる(と云ふ事は凡ての人に適用し得べし、唯だキリストが他の人と異なる處は、此眞理を Realize 現實にせしにあり、此哲學的思想が此説の根本となれりとするも不可なきが如し、

カントは理想的のキリストと、歴史的のキリストとの二つに區別し、唯だ理想的のキリストのみを取りて、歴史的のキリストに重きを置かざりき、而して彼常に曰く歴史的のキリストは、批評を受けて如何になり行くとも、理想的のキリストをだに明に認識せば、人間は之に由て以て



救はるべしと、近時に至て英國オックスフォード大學の教授グリーン  
 氏此説を主張せり、而して其説はウォールド夫人の著に係かる、有名なる  
 「ロポルト、エルスマヤ」と云へる小説にて布演せられたり、而してグリーン  
 氏は自からは「エウテリアン」派にも何派にもあらず、唯だ有名なる哲  
 學者にして、宗教上、道德上、錚々たる人物なり、

第二 謙讓説ケリシスム（即ち虚ケ虚チふツクなる語ハより來りたるなり）「Kenosis」ケノシス固有の  
 能力を縮め、自から謙りて人の像を取りたりといふに在り、此説の起原  
 は腓立比二〇六以下、彼は神の軀にて居しかども、自ら其神と匹く在る  
 ところの事を乘難きこと、意はず、反て己を虚うし、僕の貌をとりて人  
 の如くなれりといへるより來る、此説の概略を述べれば、キリストは御  
 自身の性質より云へば神なれども、此世の中に在る間は、固有の能力を  
 縮めて、人間同様の者となり、能はざる所、知らざる所もありしと、此説に

於ては神性を基本として人性を假と爲す、假は即ち神なりとす、此説  
 は此十九世紀に於て大なる發達を爲し、異説亦た紛々たり、其大要を擧  
 ぐれば凡そ四種に分つを得べし、

(一) 神人兩立説 (Dualistic Type) 神の子、人性を取り、而して人性を取るに  
 於て、神の子の固有の能力に限界を付けたりとなすもの、其有名なる主  
 張者は「テリッチ」なり、

(二) 變化説 (Metamorphic Type) 神の子、天より降りて人となりしとの説  
 にて、即ち此世に在る間は、純粹の人間にして、通常一般の人と異なるな  
 しと、瑞西の「ゴード」獨乙の「ロイス」の如き之を唱ふ、

(三) 半變化説 (Semi-metamorphic Type) 神の子「ロコス」、人性を取るに於て  
 永遠なる神の存在の形狀を換へて、限ある人の存在の形狀を取れり、則  
 ち其性質は變ぜずして、只だ其存在のみ變じたるなりと云ふ、エブラル



D之を唱道す、

(22)

(四)相關説 (Relative Type) 神の子の生涯に二重あり、ロマスとしては天地宇宙に充滿し、キリストとしては神の國、救の國の間に働き玉ふとの説なり、キリストに顯れたる間は、天地萬有に其支配行届かざるかと云ふの困難より此説出たるなり、丁抹人 マートチンセン之を主唱せり、英米の神學者は神人兩性説を説けども、其如何なる處迄一致し居るか、如何に一致するかを考ふる人甚だ少し、

第三、ドルテルの説、神人其性質に於ては一なり、唯だ之が異なる點は一は限ありて、一は限なきの別あるのみ、性質の異なるものは相合する事能はず、其性質同じき者は相合致するを得、而して人は自己の缺乏せる所よりして、神に合はんとを求め、神は人を愛するよりして、己を人に與へんと欲し給ふ、是れ神人合致の成る所以なり、紀元前の哲學及び

基

督

論

基

督

論

(23)

宗教の傾向、何れも神に達せんと欲するの傾ありしも、凡ての宗教、哲學共に之に達すると能はざりしが、神はキリストに由て世界の人の願望を達せしめ給ひ、後世の人々はキリストを通して、神に達する事を得るに至れり、是れキリスト教の救にして、他の教に卓越せる要點なり、終に一言すべきは、キリストは實にキリスト教の秘義といふべし、昔より神學者の最も苦む所のものはキリスト論なり、パウロ、ラモテに送る書に云へることあり、教の奧義の大なることは更に疑ふ所なし、神肉躰となりて顯はれ、靈によりて義とせられ、天使に見れ、異邦人の中に宣傳へられ、世の人に信せられ、榮光の中に擧られ給へり、(提前三〇十五、十六)

近時流行の一新説は、キリスト教は元來山上の垂訓の如き、又た使徒教訓の如き、單純なる道德教なりしが、後カリシヤの哲學と混合するに至



りて、今日の如き教理的の宗教となりたりとの一事なり、  
 近來英國に於て <sup>博士</sup> Dr. Hatch の講義録 (ヒッパルド講義といふ中に三年前) 出た  
 り、之には基督教とギリシヤ哲學の關係を論じて、神に關する教理、キリ  
 ストに關する教理、即ち三位一體説の如きは、ギリシヤ哲學より起りた  
 りとの證據を擧げたり、之を讀む時は、成程如此くありしかと思はるゝ  
 如きものあり、併し又た聖書を研究する時は、使徒パウロ、ヨハネの如き  
 を始め、其他の弟子に於ても、只だキリストの教訓のみにあらず、多少教  
 理を教へたりし事は、十分之を證するを得るなり、

キリスト自身のキリスト論、パウロのキリスト論及びヨハネのキリス  
 ト論を調ぶる時は、愈々其事明白に至るべし、唯だギリシヤ哲學が、キリ  
 スト教の神學の發達に、大功ありし事は、掩ふべからざるの事實なりと  
 す、然れども之ありとて、ギリシヤ哲學がキリスト教の教理を組成せり

とは云ふへからず、神の攝理に由て、恰もキリストの來りし頃、ギリシヤ  
 哲學の盛なりしは、之に由て其教理を發達せしめんととの企圖に出でた  
 る事を知るべし、

神の働きは獨りユダヤのみに限らず、世界中孰れの國にもある所にし  
 て、國々によりて多少その趣きを異にするゝあるは、各國の歴史により  
 て明かに之を知るを得べし、故に哲學思想がキリスト教に入りたりと  
 て、強ちキリスト教に異分子入りたりと爲すべからず、キリスト教の神  
 に關する教理が、ギリシヤ哲學に由り發達し、又た人類及び救に關する  
 の教理が、羅馬の政法に由りて發達したる事は、吾人の大に注意すべき  
 事なり、

基督教會は未だキリスト論に、十分の解説を下したりと爲す可らず、古  
 來の學者が困難を極めし所は、今日の信徒も尙ほ困難を覺ゆる所なり、



然れども基督教會は、元と此信仰の岩の上に建てられたり、今日に於て尙ほ其活氣を有し、愈進で退くを知らざるは此信仰あるが故なり、而して信仰のキリストは、果して歴史のキリストと同一なるや、使徒等の信仰と吾人の信仰と、果して異なる所なきや、是れ最も緊要なる問題なり、余は次章に於て評論する所あるべし、

第三章 使徒の基督論

弟子等のキリストに關する思想如何、是れ第一に攷究せざる可らず、第一、ヤコブの基督論、ヤコブを以てキリスト人性論を主張する者と爲す者多し、一應理なきにあらず、何となれば彼の書も彼の演説(使徒行傳十五章)も、所謂教訓的にして教理的に非ざればなり、其書の教旨は山上の垂訓に似たる所多し、カノン、リットンがヤコブの書とキリスト

の山上垂訓とを比較せし書あり、

雅各二〇二——馬太五・十・二・三	雅各三〇七・七八——馬太五〇九
同 一〇四——同 五〇四・八	同 四〇四——同 六〇廿四
同 一〇五——同 七〇七	同 四〇十——同 五〇三四
同 一〇九——同 五〇三	同 四〇十一——同 七〇一
同 一〇二十一——同 五〇廿二	同 五〇二——同 六〇十九
同 二〇十三——同 六〇四・五	同 五〇十——同 五〇十二
同 二〇十四——同 七〇二十一	同 五〇十一——同 五〇卅三

而して其主點はキリスト教を以て、モーゼの律法に對し、新しき律法と爲すにあり、雅一〇廿五・二〇八を以て知るべし、此書を以て最も古き書ならんと考ふるものあれども、パウロの書の或者より後に出たる事明かなり、而して幾分かパウロの信仰の弊害を矯正するに在りたるや又



## 第三章 使徒の基督論

た辨を待たず、(雅二〇十八以下)多くの人々の考、即ち「チユロピングン」派の批評家の説は、キリストの教理は單に神を愛し隣を愛せよといふと根本にして、其他も凡て教訓的なりしが、後に教理的となりたりとせり、故に教訓的のものは最も古きものとし、教理的のものは新しきものとして説くの傾向あり然れども如此架空の議論は今日に用ゆ可らず雅各書已に教訓的なり、之に明白なるキリスト論なきや當然なり、されども二三の點に於て、キリストの事を云ふに、左の如き言を用ひたり、以て彼の信仰、單一なる人性説にあらざる事を知るに足る、即ち彼はキリストの弟たり(或人之を従弟とするも、弟とする方當然ならん)兄弟の間柄なればキリストを我兄といふべきに、却て主キリストの僕といへり(一〇一)且つ初の場合に於てキリストを主と呼べり、又た時に彼を榮光の主と云へり(二〇一)榮光の主といふ事は、パウロの哥林多前書に、嘗て之

と同じき事を言ひしとあり、主といふと其れ自身、已に彼と師弟君臣の關係ならざるべからざるを示す、殊に榮光の主と言ふに至ては、キリストを人間以上の救主と見し事明なり、又た彼はキリストを審判主と見做せり(四〇十二—十五)如此く、明白なるキリスト論は爰に見るとを得ざれども、兎に角キリストを人間以上のものとなし、神と同一様に敬ひし事は明なりとす、

第二 ペテロの基督論、使徒行傳に見ゆる所にては、ペテロの説教は主としてキリストを宣傳ふるに在りたり、而してキリストを宣傳ふるに當り、一はキリストの生涯の事實、其苦痛、死、復活、二は彼の生涯を以て、舊約の豫言に應ふ事を證するに在りたり、ペテロがキリストを如何に信じ居りしや、彼がキリストに對する言を以て悟り得べし、彼は吾人はキリストの名に依り救を得るとなせり(使四〇二十—四十三)又た、キ



## 第三章 使徒の基督論

リストを聖者と呼べり(使二〇廿七)又たキリストを以て神の右に擧られ、聖靈を興ふるものとなせり(使二〇三四)又たキリストを生命の主となせり(三〇十五)又た凡のもの、主といふ(三〇六)是等の點を以て、ペテロがキリストに關する思想は少くも人間以上、又た天使以上なりし事は明かなり、其書翰に於ても、亦た之と同様の主旨あるを見る、其書亦た教理的に非らず寧ろ實際的なり、故に教理的のキリスト論を望むべからず、然れども之に由ても、尙ほ幾分か彼が如何にキリストを信じ居りしかを證するを得るなり、彼得前書一〇一に彼は己をキリストの使徒といひ、(後書一〇一)にはキリストの僕にして使徒なりとし、キリストを以て預言の成就せしものとなせり(前二〇六一十一)又たキリストの死を以て吾人の救となせり(前一〇二二)〇十九二〇廿四三〇十八)又た天に在りては天使等もキリストに使はるゝものとなせり(三〇廿二)

又は彼を神と偕に讚美すべきものとなせり(前四〇十一・五〇十一・十四)又は後書に於てキリストを知るを以て、最も優れるととなせり、例へば(二〇二二)〇八三〇七十八)の如き、皆キリストを知る事を云へるなり、キリストを知るとは、尋常一様の英雄を知ると同一にあらず、神と同じき事とせるや明かなり、キリストの榮光(一〇十六十八)又た我儕の主又は救主と唱へたり、今一つ學者の中に議論あるは一〇一なり、是れ原文には我儕の神にして、救主なると讀む方當然なりと云ふ人あれども、此の如き疑はしき處は、之を固守するに及ばず、又たイエスの名は讚むべきものとなせり(三〇十八)神より外のものに對して、言ふへからざる事を言へり、是に由てペテロはヤコブより一層明白に、キリストの神性を信ぜし事疑ふへからざる所なり、

第三 パウロの基督論 聖書中最も正確と認めらるゝ者は、パウロの

## 第三章 使徒の基督論



(32)

書翰にして、殊に正確なりと認めらるゝは、羅馬、哥林多前後、加拉多の四書なりとす、而してパウロの書翰には、教理的のもの多く、爲に神學上の進歩を刺激したるもの少からず、羅、加、弗、腓、西の書の如き特に然りとす、パウロがキリストを如何に信じ居たるか、之を詳に論ずるは、到底なし、難き事なれども、左に其要領を掲げん、

(一)キリストは人にして、神人の仲保なる者となせり、(提前二〇五)「ユニテリアン」派は此語を引き、パウロは「ユニテリアン」なりとなす、然れども此書のみにては、パウロの心を知ると能はず、是れ唯だ其人性の例を言ふのみ、然れども見よ、羅馬書一〇三に「彼は肉躰より云へばダビデの裔、聖善の靈性によれば、甦りたる事に因り、神の子たる事顯はれたり」と、哥林多後書十三〇四を見よ、キリストは人の如く弱き者なりと云へり、此事のみを以て、パウロを「ユニテリアン」と爲すと能はざるなり、

論 督 基

基

督

論

(33)

(二)キリストを第二のアダムと稱へて、人類を代表する者と爲せり、羅馬書五〇十四以下、キリストをアダムに比較し十八に「故に一の罪より罪せらるゝ事の凡ての人に及びしが如く、一の義より義とせられ生命を得るとも凡ての人に及び」と又哥林多前書十五〇四十五以下「餘して始の人アダムは、生命ある魂となり、終のアダムは生命を與ふる靈となる」と云ひ、第一の人は地より出で、第二の人は天より來れりと爲す、

(三)キリストを以て天より降り、人の像を取て謙りたるものとなせり、パウロはキリストを賞稱するに、常に謙遜の事を以てせり、若し通常の人なれば、何んぞ謙遜あらん、是れ神の子の謙遜なり、(腓二〇六、七、八)「又た哥林多後書八〇九に「元と富める者なりしが云々」とあり、肉躰に於て富めるにあらず、天の位にありしを云へるものなり、是れパウロが福音の主となせる所なり、



(34)

論 督 基

(四)キリストを以て神の見るべき形となせり、哥羅西書は随分議論のある書にして、「ユニテリアン」の人は之を偽書なりとして棄んとす、蓋し之を容るればパウロの神性説明白にして、掩ふ能はざればなり、而して同書には曖昧の處少しもあるとなし、

(五)彼が過去の存在を信ぜり、已に謙遜といふ事に於ても、明白に此世の以前に存せし事を證せり、されど哥羅西書一〇十五には、凡ての先に生れしものと云ひ、又た十七にも、彼は凡ての者より先に在り云々」とあり、又た腓立比二〇六に因るも、キリスト此世に降る以前に、存在せりとする明瞭なり、是等の事を全く信ぜざるものあれども、亦た中には哥羅西、以弗所、腓立比書を全く信じ、之を説明し去らんと試むるものあり、即ち曰く實體にては以前に存在せざれども、神の思想中に、觀念として存在せりとなせり、余敢て此説の批難を試みざるべし、但し之が牽強附

會の説たるを示す、難きにあらざるを知るなり、

(六)キリストを以て造物主となせり、哥羅西一〇十六を見るに、萬物キリストに由て造られたりといへり、之は希伯來書一〇二三、約翰傳一〇及び馬太傳十一〇廿七、廿八〇十八にある思想と附合せるなり、

(七)天使等も悉く之に仕ふべきものとなせり、(腓二〇十、十一) 又た彼は凡の政と權威の首なりとあるなり(西一〇十六)

(八)彼を主及び榮光の主と呼び、神と同様に讚美せり、諸の書翰の始と終の祝福は、神とキリストの恩恵に歸せり、

(九)キリストを神と唱へたり、パウロの書翰中、キリストを神とせしもの二ヶ所あり、一は羅馬書九〇五、列祖は是かれらが先祖なり、肉體より云へばキリストも亦彼等より出づ、かれは萬物の上にありて、世々讚美を得べき神なり、アトメンとあり、之れキリストを指せるに非ずとする

(35)

論 督 基



ものあれども、是はキリストとする方、前後の關係より公平に考れば、解し易きが如し、二は提多書二〇十三に、大なる神即ち我儕の主、救主イエスキリストと云へり、此一節は或は「即を及び」と爲さば、解説し得可らざるに非ざれども、寧ろ本文の如く讀む方、穩當なるが如し、要するにパウロのキリストに關する思想は、一二節の解説如何によりて變ずべきに非ず、吾人はよろしく之を全躰より觀察せざる可らず、

パウロの書全躰の主眼は、神人一躰なるキリストに由れる救を述ぶるに在り、其十字架はパウロの大に重んじたる所なり、如何に其神性と人性とを分ちしかを知らざれども、彼が神性を認めしと明白なり、パウロ若し多神説を取りしならば、彼の言ふ所價值なきも、彼は明かに一神説を取れるものなり、又た當時の教育境遇より見るも、彼の言ふ處頗る價値ありと云ふべし、

第四 希伯來書の基督論、希伯來書は誰の著作なるや明かならず、パウロの著なりといふもの多し、又たルカなりとも云ひ、ロマのクレメンツトなりとも云ひ、又アポロなりとも云ふものあり、然れども近頃はバルナバの著なりといふもの多し、有名なる獨乙のヴァイス氏の如き、之をバルナバの著なりとなせり、何れも充分なる證なけれども、使徒時代のものなるとは明かなり、本書に於てはキリストを以て、凡て舊約儀式の成就せるものとなせり、

(一) 彼を以て祭司長なりといひ、又たメルキセデクの型なりと云ふ、

メルキセデクの事は本書中詳論す、(五〇七〇)此に由て考ふれば、本書の著者はメルキセデクは、人間に非らずと信じ居たるが如く、(五〇二)メルキセデクを以て、永遠無始無終の者となせり、(六〇廿、廿一、廿二)、

(二) キリストを以て萬物を造れる者となせり、(一〇二三、三)此處哥羅西書に



類似す。

(三)天使以上に於て、天使より事へらるべきものとなせり、希伯來書一

〇六、ダビデの語を引用して、諸の使者は皆これに跪くべしとなす、

第五 約翰の基督論、ヨハネはキリストの最も愛せし弟子にして、彼

がキリストに對する關係、恰も顔回の孔子に於るが如し、然れば彼がキ

リストに關する思想は、吾人の最も知らんと欲する處なり、而して其説

亦た頗ぶる詳なり、

(一)黙示録に於ける基督、黙示録はヨハネの著なるとは、キリスト教反

對論者も承認する處なり、本書はヨハネの書中、最も始に記されたるも

の、如し、而して黙示録はキリストの神性を云ふ頗る詳なり、

(イ)彼は始なり終なりと云へり、又た主たる神といへり(黙一〇八、一〇十

七、十八廿一〇六)。

(ロ)キリストを云ふに、常に七の字を用ふ、七は滿數にて完全の意なり、七

の靈、七の燈臺等是なり(黙一〇二十二、二〇一、三〇一)。

(ハ)彼を王の王、主の主と云へり(黙十九〇十六)。

(ニ)ヨハネ、イエスを見て死せる者の如くなれり、神と認むるにあらずん

ば、如何で如此きとあらんや(黙一〇十七)。

(ホ)彼は天の中心に在り、天使等は之を禮拜せり(黙五〇八、十一、十二、十三、

十九〇十四)本書には神の外、何も拜するものなく、天使たりとも拜すべ

きにあらずと説けり(黙示録十九〇十)。

約翰傳と黙示録と、其著者異なりと論ずるものあれども、兩書を對照せ

ば、其思想の同じきを見るなり、ヨハネ特有の文字あり、即ち道ドクトリンといふ字

なり、黙示録は始に書きし故其數少きも、十九〇十三に於て之を見るを

得べし、即ち「かれ血に染みたる……神の言云々」とあり、



(40)

論 督 基

(二)約翰書翰の基督、約翰第一書の趣意はキリストは生命の道にして、之を有するものは生命を得、有せざるものは生命を失ふとなせり、約壹一〇一に曰く「生命の道を爾曹に傳ふ」と、約壹五〇十一、十二を見れば、子を知らずといふものは父を知らずとなせり、又た約壹二〇廿二には「父と子とを拒む者は即ちキリストに敵するものなり」と云ひ、又た信者は世に勝つものなるが、之に勝つを得るは獨りイエスを神の子と信ずるに在りとせり、(壹、五〇四、五)ヨハチは當時の異端セレンサスの「ノスチシズム」を排斥することを務めたり、セレンサスの説に因ればキリストは素人人間なり、「パプアスマ」を受けし時、聖靈を受けて斯る働をなせり、又た一方にはキリスト肉躰を有せず、彼が肉躰の生活は、假りの生活なりとの異端行はれたり、ヨハチは是等に對して、嚴しき語、敵する者を以て排斥せり(四〇二三)又た五〇廿に、キリストの神性を明了に説けり、然れど

(41)

論 督 基

も其解釋に於ては異論なき能はず、キリストを以て眞の神となせり、是れ此處に始めて見る所なり、彼は云々とはキリストを指すにあらずして、神を指すなりといふ者あれども、註解上、前後の關係上、キリストと爲す方至當なるが如し、又た假令キリストとせざるも、此處にて神性を表明せしと顯然たり、  
ヨハチは愛の人と云はるゝ程、柔和なる人にして、又た絶對的宗教家なり、彼は光と暗、眞理と虚偽、罪と義、潔と汚に付き明白なる區別を立てたり、故に柔和の如くありしも、異端者に對する言は激烈なり、是れキリストを見る大陽の如く明白にして、聊かの疑をも挾まざりしが故なり、  
(三)福音書の基督、此福音書の著者に就て、近來烈しき議論あるを見る、然れども之を要するに反對論は、唯だ之が他の福音書と其趣を異にするといふにあるなり、



(42)

論 督 基

反對論は外部の證據如何にあらず、又た古よりの傳説に就てにも非ず、唯だ他の三福音書と、趣を異にすといふにあるなり、第一記事に異なる所あり、三福音書は大抵同様の事を重複し居れども、約翰傳は奇にして他に見ざる處多く、例之奇跡にしても、カナの婚筵の如き、生來の盲の目を開きたる如き、ラザロの蘇生の如き、談話にしては、ニコデモの話、サマリヤの婦人に對する話、生命の「パン」に就ての話(十三〇—十七〇)、五章の遺訓の如き是なり、第二キリストに對する思想の異なる處なり、他の福音書には明白にキリストの神の子、神たるを云ふ少し、然れども本書に於ては、緒論に於ても明白に之を云ひ、其他の言語に於ても、キリストの行狀に於ても明白に之を言へり、或人は此福音を指て、「ドクテズム」の福音と云ひし程なり、第三他の福音書にては、其思想極めて單純にして、カリヤ海に漁せし者、其他稅吏の如き輩の著の如く思はるれども、獨り約

基

督

論

(43)

翰傳に於ては恰も哲學者の如き感あり、キリストを指して道、生命、光、真理といふの字を用ひ居れり、此等の點を考ふる時は、其の内證に於て困難の處少からず、然れども左の四點を考ふる時は、幾分か其困難を除去するを得へし、

約翰の福音書は第一他の福音の欠點を補ふに在り、第二異端を排斥するに在り、故に單に歴史體にあらずして、多少議論體なり、第三、キリストに關する眞理を證明するに在り、(約二十〇卅一)、第四、本書は他の福音書と趣を異にし、ヨハネの信仰、經驗、思想を描出したるキリストの傳を著すに在り、此等の點を考へ見る時は、強ちヨハネは歴史にのみ従ひて、書きしにあらざるを知るべし、或人曰く然らば小説ならずやと、否事實なり、何んぞ小説と其軌を一にせんや、

(一) ヨハネキリストを論ずるに左の如き名稱を用ゆ、



道(約一〇一)生命(一〇二五〇二十)光(一〇三八〇十二)真理(四〇六、一〇十四)此處に於て考ふべき點は、光又たは生命といふ字は、ヨハチの他の書翰と引照して見るに、神に用ひ居を知る例之(約壹一〇五)神は光なりといひ、生命に付ては(約五〇廿六)に「父は自から生を有てり其如く子にも賜ひて自ら生を有たせたり」といひ、凡て生命の源は神に在りとは、哲學者の公論なり(約一〇四)又たヨハチが特別にキリストを指せし語は、「獨子」と云ふ事なり、アレキサンドリヤのフワイローは、道は神の顯現なりと云ふ、多くの學者は本傳がヨハチの作にせよ然らざるにもせよ、此用ひし語(道 Logos)はフワイローより學ひたるならんと云ふ、然れどもフワイローは道を抽象的になし、ヨハチは之を具體的にせりとせば、ヨハチは之をフワイローより學びしにあらざるや明かなりとす、

(二)ヨハチはキリスト過去の存在を明白に證言せり、キリストが神の

子にして「パテスマ」のヨハチに優れる處、以前より在りし一事を以て區分せり(約一〇一、一十五卅)又たキリスト自身も此事を明白に言へり(八〇五十八)に「我はアブラハムの有らざる先より在る者なり」と、キリスト過去の存在は、神性の證言に大なる力を與ふるものなり、

(三)ヨハチはキリストを神と稱へたり(約一〇一廿八)尙ほ又た約翰傳の序文を味ふ時は(一〇一、一十八)キリストの神性を論盡して餘蘊なし、「ユウテリアン」の最も困難は約翰傳にして、特に序文に在り、或は是れ實體のキリストにあらず、理想のキリストを指せるなりとて、解説し去らんとするも、人之を許さず、故に約翰傳其れ自身が正確ならずと、全然之を否定し去らんと企て居れり、蓋し約翰傳のキリスト論は、キリストを神とし神の子とせざれば、解説し能はざればなり、



## 第四章 自己に關する基督の思想

弟子等の意見と、キリストの思想とを區別すると頗る困難なり、何となればキリスト自から著し給ひし傳なく書なければなり、吾人のキリストの事を知るは、弟子等の書に由て發見するの外なし、而して弟子等キリストの行爲を顯はすに當り、自己の意見及び信仰を以て、描出したると明白にして、其傳に各異りたる處あるも、之が爲めなる事を知るべし、然れども、キリストの語は一種特別にして、容易に他人の案出し、又た摸擬し得べきものにあらず、故に其言に假令ひ少しの潤飾ありとするも、其意に至ては疑ふべきにあらず、

第一、自己の名稱、即ち己れを何と稱へられたるか、キリストが常に用ひ給ひし名稱は如何、

(一)最も多く用ひ給ひしは、人の子といへる名稱なり、此の名稱のキリストの名として、聖書に用ひらるゝ事八十四回、而して其五十回は自から用ひしものなり、此意義如何、但以理書七〇十三に在る、人の子なる言を以て己れに適用し、救主或は「メシヤ」の意味に用ひ給ひしといへる説多し、然れども之を調ぶるに「メシヤ」と同義に用ひしにはあらざるが如し、何となれば馬太傳十六〇十三の問、人々は人の子を誰といふや、の如き、「メシヤ」と同意義としては、更に其意味をなさいるなり、尤もカノン、リツドンは此問を以て、救主なる我を人々は誰と云ふかとの意とせり、然るにペテロは、爾はキリスト云と答へたるを以て見れば、此説の穩當ならざるや明かなり、リツドンは神の子なりといふを主とすれども、キリストといふが主なるは疑ふ可らず、況んや馬可傳八〇廿九に、爾はキリストなりといへるをや、人の子とは人類に對する、イエスの「メシヤ」たる



## 第四章 自己に關する基督の思想

意識を顯す語と解して可なるべし、而して第一は愛の人にして、人の病苦を軀恤するものなりとの意にして、第二は代表的の人物たる意なり、(二)次に多く用ひしは神の子なる名稱にして、之にも種々の意義あるを見る、或時は人類一般に應用し得べき用法なきにわらず、或時は「メシヤ」の意に用ひらると雖も、又た神と同性質を顯す神學的の意味に用ひらるゝことともあるべし、此言新約に四十一回程あり、此名稱は神に對する、イエスの「メシヤ」たる意識を表すといふて可なり、

(三)子なる名稱も、亦た好んで用ひ給ひし語にして、孰れも神と特別なる關係ある處に用ひ給へり、例之ば馬太傳十一〇廿七に「父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を知る者なく、子及び子の顯す所の者の外に、父を識る者なし」又た其他約翰傳五〇廿一、廿三、八〇三十五、三十八にも之を用ひたり、

## 第四章 自己に關する基督の思想

(四)王なる名稱を用ひたり(太廿五〇卅四、路廿三〇二三、約一〇四十九)  
 (五)弟子等よりは神なる語を甘諾し給ふて、之を退くるとを爲さざるのみならず、却て之を稱讚せり(約廿〇廿八)

第二、キリスト己れの名を以て、其教を立てたり、豫言者は神言ひ給はくど、神の名によりて教を立てたり、孔子の如きも述て作らず、信じて古を好むと云ひ、又た常に堯舜を稱せり、然るにキリストは獨り己の名を以て教を立て給ふのみならず、權威を以て之を教へ給へり(太五〇廿一以下十一〇廿八、廿九、十一〇八)、或は宮殿より大なる者茲に在り」と云ひ給へり(太十二〇六)凡てキリストの教は己れを以て其中心點となせり、  
 第三、己れを以て、昔時の預言者、賢人と伍すべからざるものとせり彼の「ソラモン」より大なるもの此にあり」とあるが如き是れなり(太十二〇四十二)又た馬太傳廿二〇四十一以下には、ダビデの裔といふに付け、ユダ



## 第四章 自己に関する基督の思想

ヤの王中尤も大なるものと思はれたるダビデも、己れの僕たることを明言せり、又たモーゼに對しては、彼もキリストに對しては、證をなしたることを云へり(約五〇四十五四十七)、又た馬太傳十一〇十一に於てはヨハチを以て預言者より卓越したるもの、又た人間中最も大なるものとなせしが、己れに對しては、更に比較の出來き難きものとせり、天國の主たるキリストは、ヨハチや昔時の預言者の到底企て及び能はざるものなり、

第四、人間以上の智識ある事を證言せり、(約一〇四十八)、又た約翰傳二〇廿四廿五を見るに、イエス自己を彼等に任せず、すべての人を知り、又た人の心の内を知る云々とあり、其他馬太傳十一〇廿七等にも神の事に就て、特別の智識あることを云ひ給へり、

第五、人の罪を赦す權ある事を公言せり、罪を赦すは法を立てたるも

のにあらざれば能はざる事にて、此世界にても、帝王の大權に屬するとなり、然るにイエスは平氣にて、爾の罪を赦すといふことを云ひ給へり(太九〇一、一七)、嘗に言を以て、罪を赦すといふのみならず、奇跡を以て、其能力あることを證明せり、又は路加傳七の四十七には、赦さるゝと少きものは其愛も亦た少しといひ給へり、

第六、人を審判する權ある事を告白せり、馬太傳廿五〇卅一、以下は、キリストは終に世界を審判するを比喻を以て云へるものなり、又た同廿八〇十八、及び約翰傳五の廿二の如き、是等を以てキリストが豫て弟子等に向て、人の罪を定むる勿れ人を量る勿れと、教へたるに比すれば、彼は己を以て通常の人の中に加へざるが如し、又た山上の垂訓の事を對照すれば、實にキリストの如何なる意識を以て、如此き事を云ひ給ひしかを幾分か覺り得べし、



第七、天父と父子の關係ある事を告白せり、天父に對して「我父」と常に云ひ給へり、殊に約翰傳十七〇の終の祈禱を見る時は、其關係は吾人の天父に於ける關係と、同様のものならざる事を知るべし、

第八、神と同等の權及び位あるを云ふ、如此き事は約翰傳に多くあり或人は約翰傳の外馬可馬太等には、之なしといふものあれども、能く考ふれば其趣は異なれども同じとあり、先づ約翰傳より調ぶれば、同五〇十七に安息日の事に就て語り給へる時、即ち自己を神と等しくしたるを見るなり、又同十〇卅には「我と父とは一なり」とあり、馬太傳十二〇卅二にも亦た之と同じき言あり、是は聖靈を瀆す罪に就て云へる處なるが、神に對して犯す罪と、己れに對する罪とを相比して云へるなり、

第九、イエスは弟子等に神に事ふるが如く、全身全力を以て、己に仕ふる事を求めたり、其例は馬太傳十〇卅七に「我よりも父母を親むものは、我

に協はざる者なり」と云ひ、キリストに對しては、親子も何も妨害となるものにあらざ、又同十六〇廿四にも、若し我に従はんと欲するものは、己れを棄て、其十字架を負ふて、我に従へ」とあり、路加傳九〇五十九以下には或人がイエスに従はんとして、先づ父を葬むる事を求めしに「死たる者に其死し者を葬らせ爾は往て神の國を宣よ」と、如此き劇しき語に由て己れに従はしめたり、神の權によるに非ずんば、争で同類の人間に斯る事を命ずるを得ん、

第十、生前に存在せし事を證明せり(約五〇五十八)

第十一、永遠普遍の存在を證明せり、(Omnipresence)、馬太傳十八〇廿には「わが名の爲に二三人集れる處に我も其中在り」と云ひ、同廿八〇廿には「われは世の未まで常に爾曹と偕に在るなり」といふ、又約翰傳二〇十三に「天より降り天に居る人の子の外に、天に昇りしものなし」とい



## 第四章 自己に關する基督の思想

へり、是れイエスは天より降りたれども、矢張り天に在り、地にあるも亦た天に在る事を意味せるものなり、

第十二、天より特別に出で來れるを云ふ、約翰傳三〇卅一に「ペテラス」の約翰は「天上より來るものは萬物の上に在り云々」と云ひ、又た「イエス自身も此ヨハテの言と同一の語をなせり」(約六〇卅八)又た同六〇六十二に「もし人の子故の所に昇るを見ば如何」とは、昇天のことにして、天を指して故の所と云へるなり、同八〇四十二に「我は神より出で來り」又た「神より遣されたり」と云へり、吾人も或る意味に於ては、斯る事言を得ざるに非ず、然ども「キリストは他の人と區別し、殊に斯く言ひしなり」、第十三、弟子より神の尊敬を受けて之を斥けざりし、馬太傳十四〇卅三に「海靜りたる時船に居りし弟子等、彼を拜して、誠に汝は神の子なり」と云ひ、同廿八〇七十八其甦りたる後に、十一の弟子「イエスの命せ

し山に於て、イエスを拜したり、又た約翰傳に於ては、特に「トマスが我神我主よ」と「イエスを禮拜せるに、却て之を賞して曰く、爾われを見るによりて信ず、見ずして信するものは福なり」と(約二十〇廿八)。

第十四、特別な意義に於て、神の子と稱たるが故に、死に處せられたり、若し「キリストにして神の子に非らず、通常の聖人預言者なりとすれば、ユダヤ人が彼を十字架に釘けし事は正當なり」といふべし、何となれば「ユダヤの法律にては、神を瀆す者は、死刑に處せらるゝの例なり、而して己れを以て神と齊ふす、神を瀆す之より大なるはなし、約翰傳十九〇七に「蓋は彼自ら神の子となせばなり」とあり、馬太傳廿六〇六十三に於ては、尙ほ詳に之を記す、即ち祭司長の問に答へて、自から神の子なるとを言ひ、後に榮を以て來るとをいへり、其後祭司長は、此人は冒瀆すとを言へりと云ひ、終に「イエスを罪に定むるに至りたり」、此等は「キリス



## 第五章 基督の事業

トが自身に言願したる事なり、キリスト自身の意味より考ふるも、彼を以て普通の預言者と爲すとを得ざるなり、

## 第五章 基督の事業

吾人がキリストに就て奇とする所は、只だ其奇蹟のみにあらず、其異能のみにあらず、其事業亦た奇となさざるべからず、約翰傳五〇卅六に曰く、我はヨハネより大なる證あり、蓋父の我に賜ひて成遂げしむる事、即ち我行ふ所の事は、是父の我を遣じ、事を證すればなりと、是れ即ち己れ行ふ所の業は、天父の己れを遣し給ふ事の證なりと、キリスト自ら之を云ひ給ふなり、又た約翰傳十四〇十一に曰く、我は父に居り父われに居ると告げし言を信ぜよ、若し信ぜずば、我事によりて之を信ぜべしとあるを見れば、キリストの事を考ふる時に、其事業の大切なるを見るべし、

## 第五章 基督の事業

キリスト畢生の事業は、一言以て之を云へば世を罪より救ふにあり、之を三福音書の語にて云へば、神の國即ち天國を此世に建設するに在り、とす、三福音と約翰傳とは、救に付きて頗る其趣を異にせり、三福音は政治即ち社會的にして約翰傳は哲學的、或は道德的といふを得べし、故に約翰傳には、救を得ると云ふとを生命、光、自由なる言を以て説明せらるれども、三福音にては神の國或は義といふ、神の國なる語を穿鑿する時は、馬太に三馬可に五路加に十二約翰に二併せて廿二回あり、尤もパウロの書翰、并に黙示録等に七回ありて、之を總計すれば廿九回なり、其意味は神の支配或は神の政治をいふなるべし、即ちキリストの王國といふに異ならず、天國といふとは馬太に廿四回あり、是れ神の國と同義に用ゆ、天國は無形の國、又た神の聖旨の行はるゝ高尚なる國を指す、二者



(58)

とも神の政治といふにして、人間は元來神の政治を受くべき筈なるに、物質上より世界中の人悉く之を受け居るも、道德上の意識より云へば、之を受けぬもの多し、是れキリストが神の國を建設せんとする所以にして、キリストは其主、信者は其民たるなり、

此國に入る第一の必要は、悔改と信仰。是れなり、故に「パプアスマ」のヨハネのユダヤの野に宣傳したるは、天國は近けり、悔改よとの事なり、(太三〇二可一〇二)如此き主意はキリストの説教及び使徒の手翰の中にも、其重なる部分を占む、之を一言すれば新生なり、之を分ちて悔改(消極的)信仰(積極的)の二とす、前者は過去、後者は未來なり、此國の法律唯だ二條のみ、即ち神を愛する事及び人を愛する事なり、又た之を一言に約すれば、愛といふ事にして、是れ神國の律法なり、ユダヤの教を讀めば第一十誡あり、神を祭る種々の法律、宮を作る事等、繁雜に堪へざる律法あり、佛

論 督 基

基

教の如きも、五戒八戒等より進んで幾百の誡あり、繁に堪へず、孔孟の教にて、禮儀三百威儀三千といふが如し、然るにキリストは凡て外部的の法律を破て、單に精神上神を愛し人を愛するを、其王國の根本とせしは、是れ實に千古の卓見と云ふべし、

第一、天國なる思想の卓越せる事、歴山、シーザル、ナポレオン等世の豪傑は、腕力武力を以て、其王國を建んと企て、何れも十分の成效を見たるものなし、プレトリ、トマス、モール、ペリコン等各、理想的の王國に付き思想を練りたるも、是れ唯だん空想に過ぎざりし、支那の儒者は王道なるものを以て、政教一致の王國を建んとしたるも、是れ亦た徒勞に屬したり、佛教者の理想は寺院的にして、普く世上一般に及ぼし得べきものにあらざり、キリストの國は然らず、高尚なるも空に流れず、且つ廣く世に行はれ得べきものなり、キリストはユダヤの一僻村に生れたる一教師

論 督 基

(59)



(60)

## 論 督 基

にして、何れより此卓越せる思想を得たるか、奇と云はざるべからず、勿論預言者中、神の國の思想なきに非らずと雖も、何れも其明白を欠くものにして、且つ遠く之を未來に望むのみ、眼前如此き國を建て得べき事は、彼等の思ひ當らざりし所なり、殊に當時の學者は悉く之を解して、現在の國となせるに、如何にしてキリストのみ、之を以て靈の國天國と爲すを得たるや、是れ亦た奇と言はざるべからず、イザヤ書ダニエル書に、天國の事を預言せるものあれども、只だ終に世の中が、皆神の支配を受くる様になり、何處にも神の支配が普くなること、猛獸さへも柔和になるといふが如きとにて、唯だ未來に高尙なる理想を懷きしに過ぎず、然るにキリストは自身に此國を建て、又た自身が其王なりとして、現に之を建んとしたるとは、尋常一様の事にして考ふべきにあらず、

第二、王國建設の順序及び方法、引力を以て、有形の世界を統一する

(61)

## 論 督 基

が如く、キリストは愛を以て、其國を統一せり、而して愛の中心は、實に其十字渠に在るなり、彼自から血を流して其基を立つ、世の豪傑の腕力或は智力を以て、王國を建てんとするが如きに非らず、カバルニカスの太陽中心説世に出で、天體運動の秩序初めて明かになりたり、天國の教に由て吾人は初めて、修身の秩序を見るを得、殊に愛を以て心の中心と爲すが如き、道德上古今の卓見となさるべからず、古來義を以て道德の中心と爲すものあれども、其弊や法律的に流るゝに至る、又た智を以て其中心となし、或は勇を以て其中心と爲すが如き、古今各國に於て、種々なる道德試みられたりと雖も、キリスト教の道德の如き、圓滿にして弊害なきものは、未だ嘗て他に其比を見ざる所なり、道德の基礎とする所は各異にして、ストイックは道理に従ふと、プラトニイ哲学にては神に倣ふとを以て、根本と爲す、此點に於ては、ストイックと儒教とは殆んど



(62)

其轍を同ふす、又た道徳を施す上に於て忠孝を中心とす、又た封建時代にては、勇氣は凡ての道徳の根本となり居りたり、其立方に依て實に奇怪なる現象生ず、我國にても勇氣といふもの主となりしが、其爲めには如何なる不品行をなすも差支なかりし、男女間の不潔の如き、更に道徳に關係なかりし如き有様なり、是れ日本の歴史に於て、非常なる道徳家にては、一箇人の品行は、殆ど取るに足らざるものある所以なり、天國を建つるの順序は第一、先づ所謂福音は貧き者に説かるゝものにして、下より上に及ぼし、愚より賢に及ぼすの法なり、キリストの説教中に「貧者は福なり」といふの言あるを見て、恰も佛教に乞丐して食する事を貴ぶ如く、貧其れ自身を貴しとするものなりといふものあれども、是れ大なる誤なり、只だ貧者が最も憐むべくして又た其心眞理を受け易くなりしより、先づ之に説きたるものにて、敢て貧なるものが、道徳上貴

論 督 基

基

督

論

(63)

しといふにあらず、彼のわが來るは義者を招く爲にあらず、罪ある人を招き云々と云へるも、亦た決して罪ある人、義からざる者が貴しとの意にあらず、唯だ其救ひは極下層よりして着手せりとの意なるのみ、キリストの如此き法を取り給ひし理由は尤も多し、其著しきものは、(一)下等社會は、謙遜にして教化し易き事なり、學者及び高位の人は、高ぶりにて容易に眞理を受入るものにあらず、之に反して貧しきもの、位卑きものは、己れの足らざるものなるを知るが故に教ると易し、故に古來何れの國にても、キリスト教の廣まるには皆如此き方に由れり、もし上等社會より道を傳ふる時は、其方法時としては、行はれざるに非ざるも、常に行はるゝ事は難し、

(二)下等社會は社會の元質とも云ふべきものにして、此部分にして、若し進歩するに非らざれば、社會は到底眞の進歩をなすを得ざるなり、何れ



(64)

の時代に於ても、上等社會は少數にして社會の多數は下等なり、如何に其一部分が進歩するも、全部進歩せざれば眞の進歩と云ふべからず、支那に於ても、明君位に在り、賢相朝に在る時は國能く治ると雖も、一旦其君相其位地を去るに至れば、直に元の如くなる、と普通の實例なり、下層より進むるは頗る緩慢なるが如きも、最も安全なる仕方と云ふべし、

(三) 下等社會を先にするは、社會の平均を維持せんが爲めなり、賢は益々賢、愚は益々愚に、貧は益々貧、富は益々富むは社會の一大法則なり、恰も物の高所より落る有様にて、下に落つる程、其速力の益々加ふるものなり、是れ貧富、賢愚、學者不學者等の懸隔の生ずる原因にして、文明に進む程益烈しくなるは、實に歐米學者の常に痛嘆する所、世の學者此順序方に注目せず、漫に自由貿易を獎勵し、政府は關涉せずして、之を放任し置くべしとなし、此百年間社會の發達を自然に放任し置きたるは、歐米

論 督 基

基

督

論

(65)

諸國の大なる過ちにして、爲めに貧は益々貧に、悪き者は益々悪く、終に社會黨虛無黨の如き、不平黨の勃起するに至れるも亦た怪むに足らざるなり、弱者貧者より着手せざれば社會に不平均を來すを免れず、キリストの如此下層より着手せしは蓋し此理なりしならん、

(四) 下等社會は眞に恤むべき者なり、勿論貧者の中に自業自得の者あれども、中には眞の不幸により、幼時の教育の悪きにより、夙く親に離れたるによりて、貧困に陥る者多し、如此きを恤むこそ眞の施とは云ふべけれ、又た自業自得の貧者にても、其境遇に陥りしは、教育なきか又は遺傳に因るものにして、恤むべき者たるには相違なし、富貴の人は精神に於て欠くるあるも、肉躰に於て幾分か満足す、故に世を恤むものは先づ社會の下層に着手せざるべからず、

(五) 神の大能は之に因て顯はる、一寸考ふる時は甚だ解し難きが如き



基督論

も深く考ふれば頗る味あるの言なり、キリストの傳道せるや、力あり智慧ある者は信ぜず、貧き者無學なる者は却て之を信ぜり、其の時イエスは、此事を智者達者に隠して赤子に顯はし給ふを謝す云々と云へり、下等社會の者、救を得るに於て神の榮光愈現はると云ふべし、

キリストの其國を建つるや、開發的にして革命的に非らず、是れ世の改革者と大に其趣を異にする所なり、彼は天國を建つるに於て、直ちに世の惡きもの反對せる者を悉く取除き、以て其國を建つるといふ事を爲さず、當時奴隸の例あるも之を禁せず、酒を飲むものあるも彼は敢て禁酒主義を取らず、當時一夫多妻なるも直に之を一夫一婦とせざりし、思ふに當時教會中には尙ほ一女多妻のものありしが如し、其證はパウロの書翰中に「監督たるものは一個の婦の夫たるべし」(提前三〇二)と云ふが如し、如此き句は或は曲解して、後妻又は離婚等なきもの、如く取る

基督論

人あるも、是れ牽強附會の説たるなり、キリスト其教を布くに、有機的方法、開發的方法を取れり、キリストの譬喩を見れば之を知るを得べし、彼の芥種、麩種の譬喩の如き、殊に可七〇廿七以下の譬の如き即ち是れなり、此不完全なる社會を理想的に改革せんとするは、根底よりせざるべからず、然れども是れ器械的方法、以て其の目的を達すべきに非ず、吾人は大にキリストの方法に就き學ぶ所あらざるべからず、或人は直ちに理想的の教會を建設せんと企つるものあり、予曰く是れ空想なりと、二三十世紀に至りては或は出来るやも知るべからざれど、不完全なる社會に一の完全なる教會を建つるとは到底望むべからざるの事たり、寧ろ其よりも多少不足する處あるも神の道を廣く傳ふる時は其結果として、理想に近き教會を建つるに至るや明かなり、之に關してキリストの戒あり(太十三〇廿四以下)戒むべし、彼の「ブレモス、ブレソレン」



の如きは全く之に反せるなり、如此き新奇卓絶なる思想をキリストは何處より得たるや、吾人の解釋する能はざる所なり、

第三、キリストの教旨 一、神に關する教理、イスラエル人の信仰したる神は見る可らざる、近づく可らざる光榮ある神なりしが、キリストの顯はし給ひたる神は、人類の父なる神にして、愛すべく、近づくべき神なり、舊約書中に神を父といへる處なきに非ず、例之ば歴史略上廿九〇十塞亞九〇六六十三〇十六六十四〇八の如き是れなり、然れども此等はキリストが天の父と云ひし所と、其意味大に異れり、イザヤの如きはキリストに對して、斯く云へるが如し、歴史、以賽書皆イスラエル人の父の神と云へるの外は見へず、キリストは初めて天父はイスラエル人のみの神に非らず、世界萬民の神、恩恵及び愛の神、近づくべき神なる事を顯はせり、キリスト常に父の神と云ふも、其語に一種新しき意味(萬

民の父(を)加へたるなり、一神を信ずるはユダヤ教に於ても明白なり、要するにイエラスルの神は封建時代の帝王の如く、恐懼すべき者、重にイスラエル人の神と云ふ思想を起し、マホメットの一の神は宿命説にして人間が一切神の事を左右すると能はず、只だ天命を待つの外なし、然れどもキリストの神は祈禱に由て方向を轉じ、自由自在になり給ふ愛あり恩恵あるの神なり、キリスト曾て自から有神論の如き、哲學的の議論を爲さず、又た哲學の書も著さず、然れども神の愛を最も善く實際に適用して教へたり、

二、人間に關する教理、(一)人の生命の貴重なる事を教ふ、當時の思想にては、己れの國と他の國とを比較して、自國のみを貴び他國を蔑しめ、奴隸を獸類視したり、然れどもキリストは人の生命を如何にも貴重なるものと云へり、(太十六〇廿六)又た馬太傳十八〇十一十四に「爾曹此の小



き一人にても慎みて云々」とあるが如き、一個人の貴き事、彼に永遠の生命あると、又た其の靈魂の亡びざるを教へたり、

(二)人類は皆神の子にして同等なる事を教ふ、永遠の生命を有するは學者祭司に限るにあらざ、萬民一様に神の前に高尚なる生命を有するなり、キリスト門徒に向ひて、爾曹ヲヒの稱を受くるなかれ云々」と(太廿三〇八—十一)以て人類の同等なる事をいへり、

三、道德に關する教理、キリスト教に於て眞の道德は心に在り行にあるにあらざ、是れキリストが道德上第一の教なり、例之ば山上の垂訓を讀めば、人を殺す勿れ」とあり、殺すことのみ罪たるに非ず、此心を有する者既に罪なり、(太七〇七)姦淫の戒も女を見て色情を起すは、已に罪を犯せるなりといひ、施濟は陰に仁惠を爲すべきとを云ふ、如此く凡て其心の奥底より出でざるべからざるを説く、近來道德大に衰へて、唯だ外

形のとのみとなれり、實にキリスト教的道德の切要なるを知るなり、イエス曾て曰く、凡て口に入るものは、運て厠に落るを知らざるか、口より出るものは心より出づ、これ人を汚すもの也、蓋し心より出る所の惡念、凶殺、姦淫、苟合、盜竊、妄證、謗讟、此等は人を汚すものなり、然ども手を洗はずして食ふは人を汚さず」と(太十五〇十七—廿)又た彼が道德の標準は天父にてありたり、彼は馬太傳十一〇廿八に於ては其己れに従ふべきを云ひ、同五〇四十八に於ては天父の完きが如く全くなるべし」と教へ給へり、世人は道德上、賢人君子を以て模範とするも、キリストは神の外に模範とすべきものなしとせり、

四、信仰の教理、吾人の神に義とせらるゝは、其行に因るにあらざ、其信仰にあり、是れ即ち神の救を得るの力なり、眞の宗教は神を信じ基督を信じて、始めて人間の道德立つとせり、又た社會的の教にては、一言に云



へば、人を愛するとなり、而して此一言の中には凡ての教を含むキリストは人を愛して敵をも愛せよと教へ給へり、  
 其他夫婦の教理に關しては、家族の起源なる夫婦は、二人一體なることをいふ、國家の教に就ては、キリストの教は殆んどなきが如し、然れどもキリストが、カイザルのものはカイザルに歸せ太廿二〇廿一と云ひて、宗教の事と國民の義務とを別事とせしが如きは、近頃其意味を解し得たる程にて實に高尚なる卓見といふべし、キリストは何の國をも愛し給ふべけれ共、先づ自國の者を大切になせり、是れ即ち近きより遠きに至るの謂ひなり、然れ共彼は之が爲めに偏僻の誤に陥りたるとなし、  
 第四、事業の結果、結果にて知れとは、キリストの教なるが結果とは随分六ヶ敷となり、原因一に非ず多くあるを以て、果して其結果が其原因より起りしや否を極むるは最も難しとす、然れ共其結果明白に分りた

る時は強き證據となる、今キリストの王國の結果に付、大意を述んに、

(一)キリストの出處及び教育、吾儕が神學上の思想を取去り、教會の信仰を一時忘れて、單に歴史的のキリストを見れば、彼は何地に生れ給ひしかといふに、ユダヤのベテレヘムにして其生長せしはナザレとて人の卑むる處、家は富家にあらず、下等社會の生活なり、加之三十歳の時迄其父と共に賤しき職業をなせしと明なり、其教育は如何、當時の教育といふべきものは今日と異にして唯だ古の律法及び豫言の書を読む位なりしが、キリストはそれすら受けたるとあるは疑はし、是れ他の人が彼は木匠の子ならずや、如何にして、文字を知らんやと云ひしを以て明なり、出處如此く、教育亦た斯の如くなるにも拘はらず、其舊約を解するや、當時の學者を驚かし、又た其教訓に於ても、天國の思想に於ても、世に比ひなき新思想を有ちしとは、實に天下の人の奇とする所なり、



(二)キリスト布教の年月、キリストが何年間傳道せしかは、随分困難の問題なり、如何となれば、四福音ともに昔編年の記事にあらざるを以てなり、今日の人が或は三年、或は三年半、或は二年半と云ふは、約翰傳の逾越節を基礎として、是を定むるものなり、其説の分るゝは同傳五章のユダヤ人の祝節を、逾越節とすると他の祝節と爲すとに由れり、此祝節は逾越節にあらずして、他の祝節ならんとは、多くの人の取る所なれば、大抵キリストの傳道は、二年半を過ぎざるべし、兎に角其短日月なるとは著し、之を孔子、釋迦、ソクラテスに比すれば十分の一にも足らず、僅々たる年月の間に、彼の如き教を立てたるとは、是れ亦奇とすべき所なり、

(三)弟子等に及ぼす感化、弟子は如何なる人なりしか、多くはガリラヤ海に漁したる貧しき人なり、又た税吏の如きものにて、先づ社會の下層より出でたる人といふも差支なし、如此き弟子僅かに二年半計りキリ

ストに接し、而して後其の教のために身命を献ぐるに至りし事は、キリストの感化力、非常なるに非らざれば、能はざる所なり、尋常一様なる教師にして、決して如此き事のあるべき筈なし、其の感化力の大なりしは疑ふべくもあらざるなり、

(四)キリストの終、キリスト如何にして世を逝りしか、ユダヤ人に訴へられ、祭司の長の庭にて審判を受け、ピラトの前に死刑の宣告を受け、遂に十字架の死を爲せり、尋常一様の目を以て見れば、キリストの生涯は失敗の生涯なり、然るに彼がナポレオン、シーザー、アレキサン、ドルよりも多くの信從者を有し、アリスト、トル、ソクラテス、プラトよりも世に多くの哲學思想を引起し、文明國の精神且つ勢力となれるとは、如何にも解説し難き所なり、是れに付き釋迦、マホメット、孔子、ソクラテス等と比較なすものあるも到底同日の論に非らず、其中最も近きは釋迦な



(76)

## 論 督 基

るも、前四ヶ條を以て對比すれば、大に異なる所あり、キリストの感化に付て、種々説を爲すものあり、第十八世紀の終にギツボン羅馬史を著して、キリスト教の傳播せし理由五項を擧げたり、第一は初代信徒の熱心、第二は未來の信仰、第三は奇跡の信仰、第四は信徒道德の優等なる事、第五は教會政治の整理宜きを得たる事、是れなり、以上五條を以て説明すれども、是れ唯だ間接にキリスト教の一種の勢力たるを説明せしものなり、何となれば初代信徒の熱心は何に由りて起りしか、此説明なかるべからず、其の感すべき事は何歟、未來に付てはソクラテスも、プロトも、皆な之を教へざるものなきも、人々は唯だ此事を漠然に信じて敢て確信なきも、獨りキリストの弟子等は、何によりて此くの如き確信を得たるや、此説明なかるべからず、奇跡に於ても亦た然り、奇跡は各國に之あり、然るに特別に彼等が之を信ずるの理由なかるべからず、信徒の道

## 基

## 督

## 論

(77)

徳の高き、キリスト教の感化の大なるを云はざるべからず、教會政治に於ても亦た然り、弟子等は素より政治家にあらず、何故に此制度後世の師表となりしか、是れ亦た大に考ふべき所なるべし、  
 又た佛國のレナン、キリスト傳を著して、其中にキリスト教の感化と其勢力とを言ひて、恰もキリスト及び其弟子は、時勢の必要に投じたりと、時勢の必要とは何ぞユダヤ人は以前より救主の降るべき事を待望めり、然るに救主來らずして國益々衰へ、ギリシヤ、ローマに於ては道德地に墜ち、人々善良なる學教を欲したる時、キリスト教來れり、是れ時勢に投じたるなりと、此説明亦たキリスト教の好證據となるなり、何となれば是れ神の攝理と見ざるべからざればなり、キリスト以前の歴史はキリストに向ひ、キリスト以後の歴史はキリストより湧出づ、キリストは歴史の中心なり、(モルフオールドの言)此等皆神の攝理を證明するに過ぎず、此



第六章 基督の品性及び宗教

時に當て顯はれたる偉人は正にユダヤ人、異邦人の望を充分に満足せしむるを得るの證據となすを得、是れキリストの一種特別の人たる所以にして、又た其天國の結果大なる所以なり、

### 第六章 基督の品性及び宗教

キリストの奇跡を信仰せざる人も、亦たキリストの神性を信仰せざる人も、キリストの人と爲り即ち其品性の高尚なる點は、誰も皆承認する所たり、シャープ氏の基督品性論“Person of Christ”の中に古より今に至るまで未信者の其品性に就て批評したる處あり、ピラトを始め百人の長、ウヨセファス、タシトス、プライニ、近世に於てはナポレオン、ルーソ、ミル、チャノン、グ、パーカーの如き人々なり、孰れも皆キリストの品性高尚にして、他に比類なきを承認せざるはなし、勿論中には不承認の

徒なきにあらず、

佛人ベカー氏(Packer)は歴史上のキリストのみにては不完全なりとて「良心のキリスト」と云へる書を著したり、其書中に予は良心のキリストを信ず、何となれば歴史のキリストは千八百年の古に在て、其記録亦た少し其遺れる僅少の記録を見てもキリストの欠點といふべきものを見出し得るなり、例ばキリスト十二歳の時、神殿に於て其父母の己れを尋ね居れるにも係はらず、祭司長と問答し痛く父母に心配せしめたる如きは、神の子たるもの、舉動にあらず、又た彼に従はんを欲するもの、我父を葬るとを我に許せと云ひし時、キリストは答へて死者に其死たる者を葬せよと云ひたり、是れ人情に背ける行たる明かなり、又た悪鬼をして豕の群に入らしめ、其の群を水中に沈没せしめたる如き、他人の所有權を奪ひたるものなり、又たカナンの婦人に對して、小兒のものを



(80)

基

督

論

取て、犬に與ふるは宜からずといへるは、人を輕蔑せる言にして、大人の言にあらざ、神殿にて繩の鞭を作り、兩替屋、鳩を賣る者等を逐出せしは、輕暴の舉動なり、又た「パリサイ」人に對しての語は常に過激なりといへり、此等は或は曲解せるものにして吾人之を辨ずるの要なし、其の道德の圓滿なる事、昔時より賢人聖人少からず、然れども、多くは一方に偏せる人にして、彼の伯夷、柳下惠の如き是れなり、先づ幾分か完全に近きものは孔子、ソクラテス、釋迦の如きなり、然れども是等の人にてもソクラテスは哲學者、孔子は道德的政治家、釋迦は所謂行者なり、然してキリストは如何にといふに、其德、義と仁と剛と柔とを兼備せるのみならず、彼の「パプテスマ」のヨハネの如き行者にあらざ、故に「カナ」の婚筵に列しては、他の人々と同く酒を飲み歡樂をなせり、又た一方に於ては税吏、罪人と共に、りて如何なる罪人をも斥けず、他方に於ては學者、

基

督

論

(81)

祭司を叱責したる如き、實にキリストの道德の圓滿なるを知る、圓滿なる道德は到底修行して至り得べきものに非ず、  
 道德の天真爛漫なる事、キリストの道德は所謂天成にして更に作爲の跡あるを見ず、勉めて罪に打勝んとし給ふとなく、又た勉めて善を爲し給ひし跡もなし、又勉めて人を助くるが如き事をなさず、眞に自然なり、天真爛漫たる所は天成にあらざしては、到底人が達し得べき所にあらざ、  
 キリストに罪の感覺なし、宗教に入るの門は悔改にして、宗教心の起初は罪の觀念に在りとす、是れ吾人が普く實驗する所なり、罪の觀念なくして信仰し、悔改なくして宗教に入りしものは眞の信者にあらざ、神と吾人との關係の親密なるに従ふて、益々自己の不足を感ずるは吾人一般の經驗なり、彼のパウロの如き、我は罪人の首なりと云ひ、又た、嗚呼



我れ困める人なるかな此死の躰より我を救はんものは誰ぞや云々と  
いへり、又たルーテルの己れの罪を感じて、一週間断食して祈りしが如  
き、皆何れも経験上の話なり、吾人は己れの聖潔になる程、己れの清から  
ざる事を感じる事深く、神に近づく程、神に遠かり居る事を感じるもの  
なり、汚れたる衣に少しの垢付きたりとして、容易に見出すこと能はざる  
も、純白の衣服なれば、少し垢付なば忽ち目に留まるが如く、良心明かに  
して其鋭くなれば、少しの罪にても多く感ずるに至る、只だ信者間の  
経験のみならず、キリストを知らざる人に於ても等しくある所なり、或  
時ト者ソクラテスの人相(醜面)を相て曰く、爾は悪想なり」と、其時ソクラ  
テス答へて曰く、罪の根尙我が中に在り」と、孔子も亦た、徳の脩まらざる  
學の講せざる、義を聞て徒る能はず、不善改むる能はざる、是れ我が憂な  
り、「吾復た夢にだも周公を見ず、我に數年を加して、以て易を學ぶとを

卒へしめば以て大なる過なかるべしなどいへり、  
世に罪の觀念なきものあり、是れ全く宗教心なきか、又神の觀念なきも  
のなり、少しにても宗教あり神を知るものは、必ず罪の觀念なかるべか  
らざる筈なり、然るにキリストには罪の觀念あるを見ず、他人に向ては  
常に其人々の罪人なる事を告げ、信者の祈禱にも、人の罪を免すが如く  
我罪をも免し玉へ(太六〇十二)と祈るべしと教へ給へり、常に爾曹は罪  
人、又た罪人なる爾曹云々と云ひて、未だ嘗て一言自家に及はず、又た、爾  
曹悪しき者ながら善き賜を其子に予ふるを知る云々(太七〇十二)と、又  
た約翰傳三章に於てニコデモに、人若し新に生れずば神の國を見る事  
能はず云々と云へり、彼の人の罪を云ひ又た人の罪を責むるを爲し、  
殊にユダヤ人に對して其罪を責むること厳しく、約翰傳九章末節にも  
爾曹もし瞽者ならば云々と云ひ給へり、然るにキリストは其著しき祈



「約十七〇」に於ても、聊も罪の念あるを見ず、誰か我を罪に定むるものあるや」と云ひて、已に罪なき事を明言せり、然らばキリストは宗教心なく、神を知らざるものなるか、否、彼が宗教心は如何に深かりしか、其神に近きこと幾何ぞ、然して罪の感覺なき何故ぞ、キリストの宗教は吾人信徒の宗教と大に異なる所あり、キリスト人間以上たるにあらざんば、到底説明すると能はざるなり

キリストと神との關係、普通の人間にては假令ひ熱心の人と雖ども、時に神との交通に間斷なきと能はず、通例信徒の普通の經驗は晴雨、陰霧の常ならざる秋の空の如し、或時は透明或時は陰鬱、常に神と共にありといふべからず、使徒等に於ても亦た同じく、彼等は「ペントテュスト」の日聖靈に浴せり、然して後度々聖靈を受けしといへり、然れども亦たパウロとバルナバと争ひ、ペテロの異邦の信者と食を共にすることを耻

ぢ「ユダヤ人の信者の議論に對して」たるか如き、ルーテルの失望落膽せるが如き、其人の内部に立入れば、何人も波瀾なき能はざるに、獨りキリストは神との交通、常に間斷あるを見ず、彼は常に聖靈に滿され給ひき、勿論キリストの心の明かに知らるゝは三年間にして、長き時間にあらずれども、始終神と偕に在り給へり、反對の「一事實といふべきは、ゲツセマテの祈と、十字架上の言語是れなり、彼のゲツセマテの園に於て、彼は非常に苦みて、其弟子に向ひ、我心痛く憂ひて死ぬるばかりなり」と言ひ、又神に祈りて「吾父よ、若しかなは、此杯を我より離ち給へ、されど我心の従をなさんとするにあらず、聖旨に任せ給へ」といへるは、幾分か其心に争ありしを見る、然れども此事たるや、吾人の救に關係あり、世の人の罪を負ふ爲めに、苦み給ひしとすれば、怪むに足らず、又た十字架上の言なる「ユリユリマサバクタニ」の如きは、随分議論あるなれども、ゲツセ



## 第七章 基督の禮拜

マテの祈と同じく、是れ吾人が未だ知らざる所の救拯に、大切なる關係あるとなるを思へば、敢て困難とするに足らず、兎に角他の點に於ては、始終キリストは神と偕に在り、始終神との交通に於て間斷なく、天父の彼に命じ玉ふとをなす、是れキリストの性行なり、又た彼が神に向ひ、父よ爾われに在り、われ亦たなんちに在る云々〔約十七〇廿一〕と祈れるが如き、彼の斯く神と特別に近くありたる事は、キリストの宗教と吾人の宗教との相同じからざる所以にして、如此き宗教を有するキリストは、吾人と同類のものとなすべからず、

## 第七章 基督の禮拜

初代信徒の信仰を知るの道二あり、一の信仰の告白其他記録にして、二は信徒の行爲の外部に顯はれたるものなり、弟子其他初代の信徒がキ

リストの神性を信じ居たるは、彼等の記録によりて知るを得ると雖も、外に之が確證となるべきものあり、即ち彼等がキリストを禮拜し居たる事實是れなり、

一、四福音にて見る處のキリスト在世中の禮拜、四福音はキリスト在世中の記事多きに居るを以て、其禮拜の形跡著からざるも、其書に於ては記者が其意を以て之を記載したるや明白なり、馬太傳二〇十一に東方の博士嬰兒を拜し禮物を献じたる事あり、マタイ此事を書くに當りて、キリストが禮拜を受けたるものとして此事を記せしが如し、又た同八〇二に癩病人がイエスを拜して云々とあり、希臘語(原語)にては尊敬するると禮拜するると、二者其字異れり、其他九〇十八ある宰拜して云々、同十四〇卅三、彼を拜し曰けるは云々、同十五〇廿五、婦來りて拜して云々、同二十〇二十、拜して彼に求む云々、何れも皆禮拜の意なり、

## 第七章 基督の禮拜



路加傳の方によれば五〇八に「ペテロがキリストの足下に伏して、主よ離れ給へ我は罪人なり」と曰ひたるは、彼を神と見て如此く爲せしと思はる、十七〇十六に癩者がイエスの足下に俯伏して謝したるは、尋常の敬禮にあらざるが如し、約翰傳九〇卅九に彼の目を啓かれし生來の瞽者が「主よ我信ず」と云ひて彼を拜せしはキリストに對し、神と等しき尊敬を爲したるが如し、是等はキリスト在世中に見る所の禮拜なるが、其復活の後に禮拜を受け給ふたるは、約廿〇廿八、太廿八〇九十の三ヶ所に於て見る所なり、

二、昇天後に於ける禮拜、弟子等キリストに祈て、ユダの代り一人の使徒を撰びたるは、彼等がキリストを禮拜せし實例なり、其言に曰く「衆人の心を識り給ふ主よ云々」と使徒一〇廿四、ステパノ石にて打殺されんとせしとき、主に祈りて曰ひけるは「主イエスよ我靈魂を納け給へ」と、又

曰く「主よ此罪を彼等に負はしむる勿れ」と使九〇四、又使徒行傳十〇十七に「アナニアと云へる人あり、彼は祈りて居り云々」サウロ、アナニヤ皆キリストに祈禱を奉げたり、

三、書翰に於ける祝禱、書翰を見れば其始と終に必ず祝禱あり、皆キリストに祈るものなり、例へば撒前三〇十一、同後二〇十六、十七、約壹五〇十三—十五の如き、二三の例にして皆キリストを禮拜せしものなり、又九黙示録五〇八に卷ものを取れる四の活物、及二十四人の長老皆な羔の前に俯伏し彼を禮拜せる事を掲ぐ、又同一〇五六、十四〇四の如き、皆キリストを禮拜せるを云ふなり、

四、師父 (Apostles Father) 等の基督の禮拜に關する思想、亦た使徒等と異なる所なし、

(イ) イグナチウスはアンタオケの監督にて、彼の羅馬人に贈れる書中に



彼が殉教者の名譽を得る爲めに、キリストに祈るべきとを依頼せり、(ロ) ポリカールはエベソの監督なり、彼がピリピ人に贈る書に、キリストの祝禱を以て始め之を以て終れり、其中に「我主キリストの神及び父、又た神の子イエス、キリスト永遠の祭司、彼自から讀者をして信仰と眞理と、凡ての柔和に立てしめ給はん事を願ふ云々」の語あり、(ハ) ジャヤステン、マテウスは其辨證論に、キリスト信者は唯だ神のみを禮拜すと主張したれども、子と聖靈と共に禮拜すべきものなりといへり、(ニ) アレキサンドリアのクレメントの書に左の如き言あり、あゝ人よ、人にして神たる彼を信ぜよ、あゝ人よ、苦痛を受けて崇められたる活ける神を信すべし、と、(ホ) トルトリアンは離婚の不可なる事を論じて、左の如く云へり、夫婦共に救主を禮拜するを得ざるが故なり、と、(ヘ) オリゲンは屢々イエスを拜禮するは信者の義務なりと論じたり、此外當時に行はれたる讚美歌を

見るも、殉教者の祈禱を見るも、キリストに祈をなし居りたりし例證枚擧に違あらず、

五、異教者の觀察 プライニイ小亞細亞の知事たりし時、當時の帝王ツラリアンに贈れる報告書に左の如き言あり、曰く、キリスト信者は或る定まりたる日、朝早く起て集會をなし、キリストを神として讚美するとを爲すと、又たアドリアン帝アレキサンドリアよりロマの朝廷に贈る書中、アレキサンドリアの人民の狀態を記述せるに當り、左の如く云へり、アレキサンドリアの人民は兩派に分れ、キリストを禮拜するものとセラピスを禮拜するものとあり、と、ルシアンはキリスト信徒を評して、彼等はパルステナに於て、磔刑に擧げられたる一奇人を禮拜するものなり、といへり、セルサスはキリスト信徒を攻撃するに、其言行一致せざる事を以てせり、彼等は多神教を批難しつつ、自からは多神教即ち神の



(92)

外に、キリストを拜するを爲す、又た彼等は偶像教を非難すれども、偶像より尙ほ悪くして價值なき死したる人を禮拜するなり」と、如此き點は明白なる事實なり、キリストの禮拜を以て後世に起れりと爲すは、正確なる事實に反する推論と爲さる可からず。

キリストの教旨は只だ神のみを禮拜するに在り、之に關したるキリストの語は多からざるも、太〇四十には、サタンよ主たる爾の神を拜したるにのみ事ふべし」と、舊約書を引て之を斥け、且つ自ら此主義を十分に實行せられたり、ペテロ、コルネリオの招きを受けて其邸に臨む、彼之を歡び迎へて、足下に伏して拜せり、然るにペテロ之に對して如何にせしや、彼之を扶け起して曰ひけるは、起てよ我も人なり」と、彼は嚴然コルネリオの彼を拜するを拒みたり、使十〇廿五、パウロ及びバルナバ、

論 督 基

基

督

論

(93)

ステラのの人に神として祭られんとするや、己れの衣を裂き、走り出で喊叫ひ云けるは、人々は何故に此事を爲すや、我儕も亦爾曹と同情の人なり」と、使十四〇十一、十五、使徒等の思想には神人の區別、決して混ずるとなきを見るなり、又たヨハネの黙示録にも之と同様の思想あるを見る、ヨハネ、天使の足下に拜伏して拜せんとす、天使之を拒みて曰ひけるは、然すべからず、慎めよ、我は爾と同じく僕なり」と、黙廿二〇八九、天使も亦た拜すべからず、神の外に吾人の拜すべきものあらざるなり、ヘロデ王曾て王服を着け其位に坐して人民に語れり、民之を讚美して曰けるは、此は神の聲なり、人の聲に非ずと、彼榮を神に歸せざるにより、主の使者直に彼を撃ち、彼は蟲に噬まれて死したるの記事あるを見る、使十二〇廿一、當時神に對する思想の、如何にに嚴肅なりしかを知るに足らん、此の如く人々は一般神を畏れ、狼に神の名をさへ口にせざる時に於て、



## 第八章 基督の復活

キリスト、弟子等の禮拜を受けて拒まず、弟子等も更に怪まざりしを見れば、正しくキリストを以て、人よりも預言者よりも天使よりも、優れる神の示顯なりとして信ぜしや明かなり、

## 第八章 基督の復活

キリストの降誕と變容と復活との三は、互に連結したる事實なれども、此には唯だ其復活の事のみ論ぜん、

復活はキリストの最も重じたる所にして、之を以て己が救主たるの休徴となせり、馬太傳十二〇卅八以下を見るに、人の子も三日三夜地中に在るべしと言ひ、其他十六〇一—四廿路九〇廿二太八〇十二等彼には種々不思議の力ありしも、獨り其復活以て唯一の休徴となせり、使徒等も亦た之を以て信仰の基礎となせり、哥林多前書十五〇十七、キ

リスト甦らざりしならば、爾曹の信仰は徒然、なんぢらは尙ほ罪に居ん、彼得前書一〇三、我儕を再び生み、我儕をしてイエス、キリストの甦りたまひし事に由て活ける望を得させ云々、又た羅馬書一〇四にパウロはキリストの神性を云ふ時、其復活を以て之が證となせり、使徒等はキリストの復活を證明するを以て、傳道の第一義となせり、是れキリストの命令に基けるなり、即ちキリスト昇天の時に、爾曹は此等の事の證人なりと告げ給ひたり、路廿四〇四十八、又弟子等の使徒を撰ぶには復活の證人として選べり、使一〇廿二、又た使徒行傳二〇二十四—卅二を見るに、彼等の説教に於て専ら復活の事を説けり、是れ彼等の説教の力ありし所以なり、同三〇十五を見れば、同じく説教中に復活の事を大切となせり、又た四〇十を見れば、彼等が迫害を受けしはキリストの復活を唱へしに由れり、五〇卅に由れば、復活の事を以て説教せり、

## 第八章 基督の復活



又たペテロのコリネリオに説教したる言の中にも復活の事を云へり、(使十〇四十三)。パウロの説教を見るも亦た然り、パウロはキリストの復活の時に居らざりし、然るに何故之を説くかといふに、彼のダマスコに行く途中キリストを見たとあり、故に之を見たるに同じ、使徒行傳十三〇卅二を見るに彼は復活を主として説教せり、パウロは哲學者なるが文明の中心なるアゼンスに於て説教せし時にも、哲學を説かず、宗教の論理を云はず、人々の嘲笑するキリストの復活を以て主眼とせり、(使十七〇六—卅二)。使徒行傳廿二〇六以下に依るにパウロ自家の経験を述べて、キリストの證人として選ばれたる事をいへり、其他使徒等が説教を爲す、其要點は多くキリストの活復の事なりし、

聖靈は此復活の信仰の上に降り、教會は實に此信仰の上に建られたり、弟子等が始めキリストの十字架に釘けられてより、失望落膽或者は故

村に歸りて舊業に復せんとし、或者は其後如何になるやを心配し居れり、蓋し當時キリストに向て、使徒傳一〇六の如き問を發したるに於て明かなり、然るにキリスト昇天の後、其信仰大に異り、ペンテコステの日に、彼等聖靈を受くるに及びて、キリスト復活の證人となるに至れり、復活の事實、聖書中に在る復活の事實を調べれば、凡そ十ヶ所あり然れども或は同一の事實を二様に記載せしともあるべければ、必ずしも十回と定むること能はず、此復活の事を一纏に記せるは、哥林多前書十五〇三以下にして六回あるを見る、然るに四福音書を引照して考ふれば、度數猶ほ多きが如し、

第一 マクダラのマリアに顯はれし事(可十六〇九約廿〇十六)

第二 他のマリア及びサロメに顯はれし事(太廿八〇九十)第一と同一なるか將た別

なるか判然せず



(98)

- 第三 ペテロに顯はれし事(哥前十五〇五路廿四〇卅四)
- 第四 イエス途中にて二人の弟子に顯はる(路廿四〇卅二)
- 第五 十人の弟子に顯はる(約廿〇十九路廿四〇卅四卅六)
- 第六 次の安息日十一人の弟子に顯はる(約廿〇廿六以下)

以上はエルサレムに於て

第七 テベリア湖にて七人の弟子に顯はれし事(約廿一〇一二)

第八 ガリラヤの山上にて使徒に現はれし事(太廿八〇十六可十六〇

十四十八路廿四〇四十五四十九)

第九 主の兄弟ヤコブに現はれし事(哥林前十五〇七福音書には欠く)

第十 橄欖山にて昇天前弟子等に現はる(路廿四〇五十使一〇四)

以上十回中同事實を反覆せしことなきを保せず、故に確に其數を知る事能はず、然れども、一度ならず幾回も現はれしは明かなり、

論 督 基

復活の説明、古來復活に付き種々の説明ありたり、第一は之を以て虚構と見做す説なり、

是れ獨逸の正理派の神學者及び英國の一神教の學者の主唱する處にして、實際復活はなし、然れども舊約の預言にもあり又たイエスも此事を言ひ給ひし事ありたれば、弟子等此説を構造して宣傳せしものなり、此説第十八世紀の末より、第十九世紀の上半期迄流行せしも、今日殆ど之を顧るものなし、

論 督 基 (99)

第二はキリストの死は、一時の氣絶にして眞の死にあらずと爲すの説なり、始めて此説を唱へしは獨乙のシエラエルマヘルなり、後之を和唱せしもの少からず、現今の學者中、恐らくは之を取るもの少からん、此説の欠點を擧ぐれば、(一)十字架に擧げられしキリストが、一時氣絶して蘇生したりとなすも、眞正一時の氣絶ならば、争で弟子等に復活の信仰を



與ふる程の働を爲し得ん、古來蘇生者なきに非ず、然れどもキリストの如く、十字架にかゝり其脇を刺され葬られて、三日にして蘇生せしものあるは未だ曾て聞かざる處なり、(一)イエス何時眞に死せしか、其死期なかるべからず、始め十字架の死が眞の死にあらずとせば、昇天の時まで現はれ玉へるキリストは、如何にせしや、其儘昇天なし給ひしか、又た昇天もなしとせば、肉躰の儘忽然消失せしか、其何れにあるか、彼が死期を見出す可らざるなり、(三)果して如此きとありとせば、キリストは、弟子等に誤解を興へて正さとりしなり、然れども眞實のキリストに於て、如此き事あるべき筈なし、

以上熟考し來れるが如く、固より如此き事あるべき筈なし、故に今日に於て此説を取るもの稀れなり、

第三 幻夢記 Visionary Theory は心理學上にて云へば、自己想像の作用が

肉眼を以て見る如く見ゆるを云ふ、恰も彼の熱病患者が熱に浮かされて、何か怪物を見るとあるが如し、夢は睡中の幻にして、幻は醒中の夢といふべし、此説はストラウス、佛のレンナン、センケル、レヴェンリー等、極端派の主張する所なり、ユニテリアン派、獨乙の自由神學派の人々多く此説を取る、日本に於て此説を公にせしは、島地黙雷師が報四叢談と云へる雜誌に掲載せしを始めとす(明治六七年)又た明治十四五年頃教學論集に再び此説を出したり、予は當時六合雜誌に於て此説を批評せり、此説の根據は(一)聖書中イエスの他の事は明白なれども、獨り復活の記事は曖昧にして、自家撞着の事多し、(二)何故イエスは弟子のみに顯はれて、ユダヤ人に顯はれざりしか不審なり、(三)感情の過度なるマクダラのマリヤに最初顯はれしは不審なり、(四)學術上に於て根據なし、即ち凡そ宇宙に於て、かゝる不思議なる事あるべからず、此世の中一切理法に由



(102)

て成立す、然るに此事は學術に合はざるなりと、今此根據に就て少しく考ふべし、

基 督 論

學術の理法に合はずとするは、即ち超然的の事なしといふ理なるか、吾人は預め先天の理法にて之を定むる能はず、故に是を以て復活は實際なかりしといふは取るべきの論に非ず、之も理由なくして否定すると一般なり、幾ど論駁の價值なし、第一の難問、復活の記事曖昧にして、自家撞着の事ありといふは一應考ふべき問題なり、四福音に出る處同じ事のみを記さず、皆に復活の事のみならずして、其他の記事に就ても、四福音書を一々符合せしむる事は至て困難なり、されど又た三日目に甦り給ひたる事、最初マリアに顯はれ給ひたる事、復活の報に接し弟子等の驚きし事、又た彼等に顯はる事は大概四福音書に記せり、故に復活の記事は他の部分に比して、殊に曖昧なりと云ふべからず、第二の難問、イエ

基 督 論 (103)

スが弟子のみに現はれて、エドヤ人に顯はれざりし理由は、キリストの奇跡を行ひし精神より考ふれば、かゝる事あるは當然なり、蓋はキリストは信仰ある人の前にあらざれば、奇跡を行はず、又た信仰の度に從ひて大なる奇蹟を行へり、其故に彼のヤイロの女を癒せし時、又た變容の時にも、唯だ三人の弟子を伴へるのみ、其理由は馬太傳十三章十節より十六節までに於て明言せり、凡そ聖書全體の主旨は、人類道徳上の程度に從て、其眞理を顯はすにあり、由之考ふれば弟子等のみに現はれて、エドヤ人に顯はれざりしは、當然の事と思はる、第三のマリアに始めて現はれし事に就ては、別に答ふる程の價值なし、却て一方より云へば、女は男より情厚し、故に彼は朝早くキリストの墓に到り、其復活を見しの外、別に理由ある事なし、

幻象説の困難 (一) 幻象の起るには、之を迎ふるものなかるべからず、何



(104)

論 督 基

となれば幻象は己れの思想を、外界の實物と誤解するものなればなり。然るに弟子等の場合に於ては、キリストが曾て己れの復活の事を預言したるも、充分其意を解する事なく、少しも之を待居たる様子なく、却て之に接して事の意外なるに驚きたるを見る、イエス明白に預言せしに弟子等は之を解せずして、其事あるを待ち居らざりしは、太十六〇廿一可八〇卅一路九〇廿二及約二〇廿廿二等により之を知るに足るべきなり、之に反して弟子等キリストの復活を聞き驚きしとは、四福音共に見る處なり、即ち太廿八〇十七、イエスを見て拜せり、されど疑へるものもありき、馬可傳十六〇十一—十四にも信ぜざりし事を記す、路加傳廿四〇十一を見れば、弟子等の信ぜざりし事を、尙ほ著しく記せり、加之二人の弟子がエマオに行きて、イエスに會せし時も、容易に之を信ぜざりし(路廿四〇廿二、廿三)約翰傳に於ては最も著しく之を記す、第一彼等が

イエスの復活を待居らざりし事、又た其復活を容易に信ぜざりし事は明かなり、(約廿〇二、廿五)是等を以て見るも、弟子等に少しも之を迎ふるの心なかりしや明かなり、

(二)幻象は感情の最も盛なるとき、即ち語を換へて言へば、最も浮びたる時に起るものなり、然るに弟子等の場合に於ては、キリストの十字架に釘られ給ひしより、失望落膽して其氣沈めるを見る、即ち幻象の起る事情に叶はざるを知るなり、

(三)幻象にて談話をなし、又た共に食する等の事あるは、信ぜられざる事なり、ステパノの死に臨みてイエスを見し如き、ペテロが天より下りし網を見たる如き現象と、復活の事實は日を同ふして語る可らず、然るに四福音によれば、種々の談話をなし共に食せし杯の事あり、只だ一言を發したる位に非ず、エマオの途中の如き、十一の弟子に現はれたるが如

(105)

論 督 基



き、其他トマスとの問答あり、如此き事を公平に思へば、決して幻象とは思はれざるなり、

(四)幻象が一人に非らずして、數十人否數百人に、一時に現たるとは信ずべきとにあらざ、故に聖書の記事を以て、悉く偽と爲すにあらざれば、幻象の説を取る事能はず、

(五)幻象が一ヶ所にあらざして、數ヶ所、數度に現はれ、數週間續きて後、突然止みたるが如きは信ずべからざる事なり、

(六)幻象なるものは元來漠然たるものなり、然るに三日目に之を見たりとあるは如何、到底解釋するを得ざるなり、

(七)若し眞の復活なかりしならば、キリストの軀は如何になりしや、其説明なかるべからず、此事に就て佛のレビニー氏の説明は、多分他の罪人と同じくゲヘナの谷に乘られ、間もなく消失せしならんとするも、是れ

全く想像説たるを免れず、聖書にはヨセフ等が之を墓に葬れりとあり、若し葬りてあらば、反對者の之を掘出して、其誤謬を正すと難きにあらざるべきを、かゝる事なきは如何、

(八)幻象は其當時に於ては、實軀と誤解せらるゝ事あるも、後には必らず其幻象たる事顯はるゝものなり、然るに弟子等は遂に之を悟らざるのみならず、之に由て彼等の信仰を復活し、此信仰の基礎に聖靈降りたり、眞の復活あるにあらざんば、決してかゝる事あるべきにあらず、

論 督 基 (107)

第四、靈軀の復活説 キリストの復活は肉軀にあらず、靈軀なりといふの説あり、カイル氏は自由神學者の一人なるが、深く復活の證據を探究し、外部の實軀なくては到底解説すると能はざるを覺り、終に此説を主張するに至れり、氏の History of Jesus of Nazara 第四卷を見るに、彼はキリストの多くの奇跡を否定し去るにも係らず、幻象説を棄て、靈の復活



説を取れり、故に「ユニテリアン」派の學者は、之を以て「カイク」の説の欠點と爲せり、試に「カイク」の説を述べれば、近時流行の幻象説は、或る事件を説明するとあるも、歴史上に關する復活全軀の事を説明し能はざるや明かなり、かゝる幻象にして自然にもあらず、又た人より起りしにもあらずとせば、之が神にて榮あるキリストの所爲に因るや明かなり、此問題に關して考ふべきとは、キリストの復活の軀は如何なるものなりしやの事にあり、是れ難問にして容易に定むべからず、或時は全く靈軀の如く見へたる處もありて、門は閉たるにイエス來り給ふとあり、(約二十〇十九廿六)又た「マリヤ、イエスを見て、イエスを抱んとせし時、我にさわる勿れ云々」と云ひ給ひしを見れば、尋常の軀にあらざりしが如し、又た路加傳廿四〇廿六卅七を見れば、弟子等集りて談話せる折、忽然其中にイエスの立ちたるを見て、彼等は怖れて之を靈ならんと思へりと

あり、馬可傳六〇十一にも變りたる軀にて顯れたりとあり、如此く彼が忽然として顯はれ、忽然として消失するを見れば、尋常の肉軀にあらざるが如し、然れども亦た否らざるが如く見ゆ、太廿八〇九、婦すゝみて足を抱きて拜しぬとあり、是れ形軀あるものにあらざれば、能はざる所なり、又た弟子等と共に食事し給ひしとあり、(路廿四〇三十卅九卅三)「トマスの疑ひし時、イエス自からを彼に顯し給へり、(約廿一〇廿七)又た約廿〇十三にもイエスの共に食せし事を記す、是等の事を合せて考ふれば、イエスの復活の軀は如何なるものなりしや、確に判別し難きも、只だパウロの哥林多前書十五章五十節の語を見る時は、復活の軀は肉軀にあらざる事を知る、又た四十日イエスの此世に在りし間は、其軀變化の間なりしと考ふるの外なきなり、是を以て見れば、キリストの復活は、事實にてありしのみならず、實軀にて甦り給ひし事も亦た明かなり、



第五、復活に對するパウロの信仰、復活の歴史的の事實なるは、前段に論ずるが如くなるが、之に加ふるにパウロの之を論證するあり、使徒パウロの書翰の歴史的たる事は、極端の自由説を唱ふる者にて、疑はず、殊に羅馬、哥林多を然りとす、復活に對してはパウロの證明大に力あり、パウロはキリストを見たりといふ、パウロは他の弟子等より聞きしのみならず、自から見たるを以て彼の信仰の基礎となせり、哥林多前書九〇一に己が使徒なる事を主張するに當て、我は主キリストを見しに非ずや、云々といへり、之を以て彼は使徒たる資格の一に加へたり、若しパウロにしてキリストを見しにあらざれば之を證明すること能はず蓋し使徒は證人として選ひ給ひしなり、又た哥林多後書十五〇にも、パウロに顯はれ五百人に顯はれ最後に月足らぬ我にも顯はれ給へりといへり、此キリストを見しと云ひ、キリストが自身に顯はれ給ひしといふ何

を言ふか、彼のダマスコに至る途中、イエスを見し事を指せるに外ならず、此事柄は彼が一身の方向を、全く變更せし著しき出來事なり、彼は此出來事の爲めキリストを信じ、其一身を献ぐるに至れり、彼が自身の履歴を述ぶるに、常に之を云へるも當然なり、使徒行傳中三ヶ所あり、廿二〇一—廿一廿六〇十二—廿の如き、然るに極端の批評家は、此事件を單にパウロが、心靈上の幻象なりとして、説明し去らんとす、其理由二あり、第一は之が記事を見るに衝突の事ありて判然せず、若し客觀的の事なりしならば、間違ふ筈なきも、主觀的の事なりしを以て、誤あるならん、其衝突の場所とは使九〇七廿二〇九廿六〇三の如き是なり、是には確に衝突の點あり、然れども此衝突の事は説明し得べし、解者曰く聲はありしならん、然れども意味を解せざりし故なり、聞かずといふに二意あり、一は解すると云ふの意あり、然れども必ずしも其解を待たずして可



なり、其前者と後者との間には二十年の歲月をも経過し居れば、其位の誤謬あればとて、別に怪しむに足らざるなり、第二はパウロは他の處にてキリストが顯はれ給ひし事を、慥に心に顯はれ給へりといひし事あり、拉一〇六十七に、彼を我心に示し給へる時云々といへり、次に哥後十二〇一—五に、主の顯現を受けたる云々といへり、されば此一事も之と同一の記事ならんと説けり、即ち共に幻象ならんと、然れども自からキリストを見たりといへるとは、パウロの思想上に、右に記せるととは判然たる區別あるが如し、爾かのみならず、パウロの改心に於て、客觀的にキリスト現はれたりと爲すにあらざれば、説明し難き點あり、第一當時パウロは迫害の爲めダマスコに至る途中にて、更に幻象にてキリストを見るが如き心に待受けたる様子なし、

第二、此事の起りたるは彼一人居りたる時にあらず、他人と共に在りし

時なり若し此事の起りたる、彼一人山中に在り、或は夜中に在りしならば、或は主觀的に非ずやと思はるべきも、他人と共に在り、彼等光を見て驚き倒れたる事あるを見れば、之を疑ふと能はず、果して誤りなれば、共に在りしもの之を打消すべく、又たパウロも此の如き欺偽を云ふ如き人物にもあらざるなり、

第三、パウロはキリストを見たる後、キリストの命令に従ひ、直にダマスコのアナニヤの許に行き、彼より「バプテスマ」を受けたり、故にアナニヤもパウロの證人となるなり、若し單にパウロの心の上の事のみなりしならば、アナニヤの處に行き、直に「バプテスマ」を受くるが如きとあるべきにあらず、是等の點を考ふれば、パウロの自から言へる如く、キリストを見たりといへるは確實にして、亦た之を以てキリスト復活の外證と爲すを得べし、



(114)

基 督 論

第六、復活の結果、復活が真に確實なる事ならば、之に由て吾人は種々の眞理を悟り得るなり、其中最も大切なる者三あり、  
一、吾人の死後の生命の確實なるを示す、パウロ哥林多前書にて、吾人復活の事を論ずるに當て、キリストの復活を以て其根據となせり、(哥前十五〇二十廿三) 又た提摩太後書の中に、キリスト死を廢ぼし、福音を以て生命と壞ざる事を著明にせり云々といへり、(提後一〇十) 是れキリストは救を以て示したる事なきにあらざれども、彼は亦た自己の復活を以て更に之を證したるなり、

二、復活はキリストの救主たり、神の子たる事を證す、之を以て弟子等を神の子の證明人となせり、羅馬書一章四節に之を明記せり、  
復活はキリストの永く存在するの實證なり、而して此信仰は吾人に最も大切なるものといふべし、夫れ我れ世の未まで常に爾曹と偕に在

基 督 論

(115)

基 督 論 終

るなり、(太廿八〇廿) わが名の爲めに二三人の集る處には我も其中に在り、(太十八〇廿) 我爾曹を捨て、孤とせず、(約十四〇十八) 等の言の確實なるを證するは復活なり、キリスト教の信仰に於ては、キリストが尙ほ我等と共に在り、今現に我曹の救主たる事を最も大切なる事と爲す、之が基督教に於ける福音主義と非福音主義との分るゝの點なりと云ふも、  
差支なきなり、



## 基督論附録

### 三位一体の説

使徒パウロ基督教の深邃なるを論じ、叫んで曰く、教の奥義の大なるとは更に疑ふ處なしと、吾人基督教の真理を詳に理會せんと企つるに於て、パウロの言真に然るを覺ゆるなり、凡そ真理は科學にまれ、宗教にまれ、詳に之を理會するは到底能くすべきの業にあらざ、吾人太平洋の海岸に立つて其前面を望観するに、其近傍に於ては、或は漁船の黒烟天に横はるを觀、或は白帆の片々水鳥の波に浮べるが如きを見る、尙其前面を見渡せば、茫茫として水天相接するを見る而已、吾人が真理に於けるの感覺之に異ならず、吾人は其真理の幾分を了解するを得、然れども其全休に於ては、大洋を望むが如き感なきを得ざるなり、

基督論附録

(1)



## 三位一體の説

基督教の教理は多くは奥義の性質を備ふるものにして、一として吾人が詳に理會し得るものなし、殊に三位一體の教理に至つては此奥義の最も大なるものと言はざる可らず、アタチシアスと同時代なるポイテールスの監督ヒラリイは、三位一體の教理を論じて左の如く云へり、曰く、是れ人類言語の範圍の外、五官の達すべからざる處、理性の理會の上  
に存するの眞理にして、天使も之を理會するを得ず、天使の主も之を知るを得ず、萬世も之を窺ふを得ず、預言者だも之を發見せざりし、使徒等も之を詮索せざりし、神の子御自身に於ひても之を明かに世に示さざりしと、吾人は實に此言の當れるを知るなり、吾人斯くの如き教理に對しては、唯理性の働の必用なるのみならず、又信仰の働甚だ必要なるを知るなり、

世人が三位一體の教理に對して、最も礙く處は其教理の明瞭ならざる

にあり、即ち悉く了解し得られざるに在りとす、吾人は理性を有するものなり、故に其了解を欲するは當然なれども、此の如き教理に對して悉く了解せんとするは、到底達すべからざるの望たるを免かれず、吾人は科學に於ても了解せざるところ少なからず、然れども科學を棄つる事をせざるなり、况んや日常の人事に於ては唯信仰推測のみを以て之を行ふこと多しとす、豈唯た宗教に對してのみ悉く之を了解せざれば、之を取らざるが如きことを爲さんや、吾人の通弊は兎角極端に走るに在り、懷疑に陥ることをせざれば、迷信に流るゝことあり、迷信に流るゝことをせざれば、亦た懷疑に陥ることあるを免かれず、是に於てか一派の神學者にして、三位一體説を教學の命題の如く、明瞭に解せんとする者あれば、他の一派は悉く此教理を否定せんとするに至る、共に極端に失するものと云ふべし、眞理は中間に在りとは、此教理に對する神學者の



(4)

議論に於て之を見る。

次に世人が此教理を受くるに於て大なる困難とする所は、之に對する思想の誤謬にありとす、明治十一年の頃、東京大學の教授中にて屢々基督教攻撃の演説を催したることあり、當時教授矢田部良吉氏は基督教の淺薄取るに足らざるを論じ、三位一神説に及び基督信者は「Unitarianism」斯様なる最も馬鹿らしき數理を信するものなりと云へり、若し基督教にして此の如き法外なる事を教ゆるとせば、誰か之を信するを得ん、然れども基督教は曾て此如きとを教へざるなり、一の神が三の「Persons」あるとは教ゆるも、一の神が三の神に同じきことを教へざるなり、勿論三位一神の教理史に於ては、吾人は常に二の極端説あるを見る、一方に於て父と子と聖靈なる三の區別を以て、常に神の三様の示現に止むるの「Sabellianism」流の説あれば、又一方に於ては殆んど三神一神なる三神

録 附 論 督 基

録 附 論 督 基

(5)

説あるを見る、共に極端に走るの誤謬説となさざる可からず、三神一神説は決して三神説にあらざるなり、吾人歴史を按ずるに三位一神説は、彼の使徒信經に於て其萌芽を顯はし「Nicene Creed」に於て之が大なる發達を見る、使徒信經は馬太傳二十八章十九節「父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」と云ふ「Christ」最後の遺訓を、少しく擴充したるに過ぎざるなり、然れども「Nicene Creed」の信條に於ては、此教理を哲學的、神學的の言辭を以て最も明白に、最も嚴重に告白したる者なり、「Nicene Creed」は正當の基督教會が依て以て、異端を防ぐの城塞なれども、其語勢は頗る穩當を失する嫌なきを得ず、獨國の神學者「Nicene Creed」は之に關して左の如く云へり、「教會が普通に受納する處の此教理は、眞理の量る可らざるの富を顯はすにも係らず、屢々哲學的思想を有する者に満足ならざる解釋を出す事あるを免れず、譬へば「Arianism」の信條に於ては、之を説明

三位一神の説



する、不必要に苛酷にして疑惑と難問を誘引するとあり、吾人は教會史の種々色を異にせる行路に於て、此の如き難問が常に其表面に出現跳躍する事あるを見るを驚かざるなりと、以後此教理の發達に力を竭したるは、有名なるアウガスチンなりとす、彼が此教理の發達に如何程の功勞あるや、容易に知るべき處にあらず、唯父と子と聖靈三者の區別を明かにするに於ては、其功勞少なからざるなり、然れども後世之れが爲めに三神説の傾向を生じたるは決して喜ぶべきことにあらざるなり、吾人は是より眼を轉じて、一言以て聖書中の三位一體説を講究すべし、聖書は神學の書にあらず、故に聖書に於て果して三位一體の實體的の眞理を見ることが得べき乎、甚だ疑はざるを得ず、然れども三位一體に關する現象的眞理に於ては、之を見ることが難きにあらず、舊約書の解釋者は「エロヒム」なる希伯來語の神は複數にして、其動詞の單數なるは三位

一體の神なるが故なりとなし、又、我儕に象りて我儕の像の如く我儕人を造り云々の如き、神自身に複數を用ひ給へるとを以て、三一の神なる證となし、又創十九、二十四、出三十一、三、詩百十、一等を以て、此教理の證と爲すが、果して其當を得たるものなるや否や、頗る疑はしき處なきにあらず、特に複數の神及び其代名詞は、三一の神を意味するなるや甚だ疑はし、若し然りとせば舊約書は多神教、三神教を教ゆるの嫌なきを得ざるなり、然れども降つて新約書に至れば、書翰の部に於ても傳記の部に於ても、此教理の萌芽と爲すべき證少からず、余は今茲に一々其引證を擧げて、證明することをせざるべし、唯使徒等祝福の言即ち哥後十三、十四の如きと、基督の最後の遺言の如きは、最も明白なるものと云ふべし、又基督の神性を證認するに於ては、四福音書并に書翰中争ふべからざる、多くの引證を以て満ざる基督の神性論は、甚だ必要にして有益なる



三位一體の説

ものなれども、予は之を他日に譲るべし、唯弟子等が之を以て父の神と全様に禮拜すべきものとなし、キリスト自身も神と同様なる尊敬を受くるに足るものとなし給ふたるとは、争ふべからざるの事實にして、キリストの神性たる最も強固なる證據と云ふべきなり(太廿八、十七、十八、路二十四、五十二、約廿、廿八、羅九、五、提二、三、希一、八、九)。

此聖書の引證は果して實体的の眞理を證明するものなるか、將た神の示現なる現象に止まる乎、頗る困難なる問題と云はざるべからず、思想の統一を保ち、複雑なる難問を避くるの點よりすれば、現象的の三位一體説に止まるを可とすべけれども、吾人は唯現象の智識のみを以て満足すべきものに非ず、既に神の示現にして三位一體なりとすれば、其體の本質に於ても、亦三位一體なるを承認せざるを得ず、是に於て乎、其理會の充分なるは差置き、勢實体的の三位一體説に及ばざるを得ざるなり。

三位一體の説

第一 萬物を通觀するに、其高尙なる程其形狀複雑なるを見る、礦物は最も下等なる故に其成立甚だ單純なり、植物は礦物に比すれば高等なりとなさざるを得ず、故に其包含する處の元素二三にして足らず、而して其成立や亦甚だ複雑なりと云ふべし、動物は植物に比すれば一層高等なり、故に其分子の成立亦植物よりも複雑なり、加之曾て植物に見ざる一層高等なる力、即ち本能と云ふ一種の能力之に加はるを見る、人間に至りては萬物他に其比なし、其靈魂たる他の動物に見ざる處にして、其複雑異種なる世に比すべきものあるを見ず、神は最も高尙なるものなり、然れば其形狀即ち其性質の複雑異種なる怪しむ可きにあらず、人間にして智、情、意の三才ある靈魂を有することあらば、又人間にして肉體と靈魂と精神(スピリット)三あらば、神にして父と子と聖靈の三位あり。



る、必ずしも信ずべからざることにあらず、スコトスエリチナ始めて智  
 情意の三を以て三位一體説を解説せんとしたる以來、此解説は中古學  
 校派 (School Men) の間に最も廣く行はる、人性を以て神性を説明せんと  
 する、到底適當の説明と云ふ可らず、然れども人性の下等動物に比して  
 複雑なるを見、類を推して神性複雑なるに及ぼすは、決して不適當の論  
 法と云ふべからず、予は三位一體論に於て徒らに例を引き比喩にたよ  
 り、牽強附會して此困難なる問題を説明し去らんとする、神學者の論法  
 に服するを得ざるなり、然れども萬有成立の有様を觀察し、類推して神  
 の存在に及ぼす、決して不當の論法に非らざるを信ずるなり、

第二 近世神學者の三位一體論にて、最も予が心を得たるもの二あり、  
 一は神の意識を根底となすものにして、二は神の愛を本とするものな  
 り、第一に關しては博士ニッチ斯く云へり、若し神を以て第一の本我と

なし、之より客觀的なる本我を生ずるも、此主觀的の本我及び客觀的の  
 本我は第一本元の中保を透して、第三の本我神の本體より出るにあら  
 ずんば、尙ほ別々にして合致するを得ざるなりと、アンマロク國の有名  
 なる神學者マルテンセンは、之と略ぼ全様の説を主張して左の如く云  
 へり、曰く、本元の三位一體の觀念は、神の性質の觀念と同一なり、故に本  
 元の三位一體の實體的の理會を持つは、即ち神の有心的の生活の根本  
 にして、必要なる形狀の理會を有つことなり、即ち神の本元に關する此  
 理會なくば、其有心的なると自己の意識を有することは理會すべきに  
 あらず、古今、エリアン派の神學者が神の三位一體説を否定して、尙ほ有  
 心的の神たるを得べくと爲し、且つ自己の意識と意思を有する父なる  
 神を表示することを得ば、之にて、神の有心的なることを、充分に保存し  
 得ると爲すは信なり、然れども我等は問はん、神が若し永遠より自から



を子たる自からより區別し、而して靈の一致に於て、子と永遠に一つなるとするに非ざれば、神が永遠より父として自からの意識を有し得ることを、唯我儕に想像するのみならず、又考ふることを得べき乎、語を換へて之を云へば、神が永遠に自らをして己れの客觀となすものと、理會することを爲さずして、永遠なる自己の意識を有すると爲すことを得べき乎と、夫れ吾人が意識を得るは萬物、外に在て吾人の本我に對することあればなり、即ち意識の起るには主觀あり客觀あり、又之に通ずるの思想なかるべからず、人類にして理性を有するとするも、外物、外に存するにあらざれば其意識全からず、されば吾人自己の意識は相對的にして、吾人以外の萬物及び靈物あるを以て全ふせらるゝなり、神は絕對獨立なり、其意識は外物を待て然る後起るべきに非ず、殊に天地未だ有らざるのさき、萬物未だ創造を受けざるの以前に於ても、尙ほ絕對獨立

ならざるへからず、而して外物を待たずして、如何にして自己の意識を有するを得る、神自身に意識の根源存するにあらざれば、此意識や起るを得ず、是れ即ち神の存在は複雑なる所以にして、神に第一、第二、第三の本我なかるべからざる故なり、此説以て悉く三位一體の奧義を解するに足らざるべし、然れども此説に於て幾分の眞理を合むことあるや決して否むべからず、

第三 次は神の愛を以て之が説明を計らんとするものなり、愛を以て三位一體の解説を試みたるものは、第一にセントヴクトルのリチャルド(千七百七十三年死す)なりとす、彼の説によれば神は愛なり、愛せらるゝもの最も價值ある者なるに非ざれば、愛は最も高尚の愛たるを得ざるなり、神は唯神のみを愛するを得、是れ單一の神にて能すべきにあらず、即ち第二の神子の存せざるべからざる所以なり、彼は如何にして第三



## 三位一體の説

位聖靈の存在に及びたるか、其論理稍不明なる處あり、然れども彼は言ふ、愛は常に自から第三者に通ずることを切望するなりと、近世に於て愛を以て三位一體の説明を計りたるは、リープテル、サルトリユース、デリツヂ、ドルテル等なり、其説明はリツヂヤルドの説明と略趣を同ふす、神は愛なり、愛は己、即ち自己を以て其第二の自己たるべき他の人に移すことなり、されば愛なる神は同じ神の性ある第二の自己に、自からを移すことをせざるべからず、第二の自己もし神たるにあらざれば、其移轉は完全なりと云ふべからず、然れども之に第三の自己あり、中保となりて兩者の間を通ずるにあらざれば、區別ある調和ある一致を保つを得ざるなり、又サルトリユースの言左の如し、曰く、神は愛なり、個人的なる第一の愛なり、されば彼に於ては、我が愛するものなりと云ふより、大なる喜びはなかるべし(馬太三十七)神は永遠の子を透して永遠の父なり

即ち永遠に愛する者永遠に愛せらるゝ者なり、キリスト彼の父に對するに永遠の我、永遠の爾と云ふが如きなり(約十七廿四)吾人は子を生むの愛と、子を祝するの愛とを區別せざるべからず、その之を祝し之に答ふる愛の氣は靈なり、然れども彼唯氣にして有心者ならざるときは、靈を透して父と子とを崇むるとは、自から尊大にすることたるを免れず、父と子を崇むるの靈にして有心者たらば、此の自から尊大にするの元素は削除せらるべし云々、此説明亦十分なりと云ふ可らず、然れども之によりて、神の性質幾分か明白なるを得るは、誣ゆべきに非ざるなり、第四 吾人之を歴史に照し之を一身の經驗に徴するに、單一なる一神教は到底人類の至情を満足せしむるに足らざるを知る、蘇國の有名な神學者フリップトは、單一なる一神論の不満足なるを論じ、左の如く云へり曰く、



## 三位一體の説

無神教、多神教、凡神教は常に單一なる一神教よりも勢力ある者なり、是等は普通の人民に對しては、一神教よりも流行し易くして且つ感化力強し、一神教が是等の大敵に對して勝利を全ふするは、唯默示に於ける神の思想と連結するとあればなり、孰れの國何れの世に於ても單一なる一神教は社會の小數より外、之を奉戴するものなし云々、一神教は印度に於ても希臘に於ても羅馬に於ても、小數の哲學者の外之を奉じたるものあるを見ず、彼のイスラエル人は一神教を以て其教を建てたるも、屢多神教の誘惑に陥るとあるを免かれず、其故何ぞや、一神教は吾人々類の至情を満足せしむるに足らざるが故にあらざや、近世單一の一神教を建て教を建んとしたるは、英國の「デイスト」なり、彼等は果して其目的を全ふするとを得しか、英國十八世紀の歴史は其希望の空しかりしを證するなり、近時一神教を以て其教を建んとするは、

諸種の「ユニテリアン」教に在りどす、彼等は果して其目的を達するとを得る乎、吾人は甚だ此に疑ふとなき能はず、獨國の自由派のキリスト教會は近來其教勢振はず、其信仰に活氣を缺くと有るを以て務て他の教派に倣ひ、外國傳道の事業を企つるとをせしが、果して之に由て活潑の信仰を維持するとを得る乎、是れ將來に於ける一疑問なり、吾人は之が一時の血氣に出て、永久其信仰を維持する能はざらんとを恐る、英國の「ユニテリアン」派は彼の有名なる「ロベルト・エルズミール」の作者なる「ウォルド」夫人の主唱に従ひ、慈善博愛の事業を以て其信仰を維持せんとを勤むれども、冷淡なる一神教の信仰は、幾分かキリストの感化を受くるにも係らず、果して永久に其信仰を保持するとを得る乎、大に疑なき能はず、「ユニテリアン」教會過去一百年の歴史は、一神教の多數人民の心を満足せしむるに足らざるとを證明すと云ふべし、英米二國「ユニテリアン」



(18)

## 基 督 論 附 録

ン教會の境遇は頗る多幸なりしにも係らず、他の教派に比して遅々と  
して進ざるは何ぞ、之に大なる缺點あるが故にあらざるなきを得んや、  
單一なる一神教は到底吾人の至情を満足せしむるを得ざるなり、  
古來單一なる一神教が大に勢力を恣にしたるは、モハメツド教の歴史  
の外他に之を見るを得ず、モハメツド教が一神教として大なる勢力を  
有するは疑ふべからず、然れども之が如此勢力を有するに至りしは他  
に種々の原因あるべしと雖も、其一原因は人間最大の情慾なる色情を  
恣にするを許したる故にありと云はざるべからず、モハメツド教の  
弱點は此にあり、其強點も亦此にあるなり、且つモハメツド教の神たる  
單一の神なるが故に其信仰は宿命的なり、宿命的の信仰あるが故に其  
信徒は勇敢なり、是亦モハメツド教の一長所にして、又其短所と云はざ  
るべからず、宿命主義は自由と並立するを得ず、又進歩と共に立つを得

ざる也、宿命主義は野蠻未開の國には、或は必要なりと云ふべけれども、  
日進の文明と並立するを得ざるなり、單一なる一神教の結果は宿命主  
義に陥らざらんと欲するも到底望むべからず、

## 基 督 論 附 録 (19)

一、父なる神の觀念の吾人の宗教的生活に必要なる、喋々之を辨ずる  
に及ばざるべし、父なる神存するを信じて、此世界も始めて透明なるを  
得、此世界を以て吾人の住家と爲すも、他の人類を以て同胞兄弟と爲す  
も、唯父なる神の觀念あるが故なり、吾人此世に存して何の思煩なく、安  
心なる生活を爲すを得るは、一羽の雀も其許なくは地に落とすなき、父  
なる神の存在を信ずるに非んば得べからず、唯神を以て畏るべきもの、  
近づく可らざるもの、高大なるもの、不可思議なるものと爲すのみにて  
は不充分なり、吾人を愛護する父の神たることを信ずるに非んば、吾人の  
神に於ける信仰や全しといふべからず、



## 三位一體の説

二、吾人は父なる神の外に、子なる神を信ずるの必要あるを見る、苟も宗教上の觀念あるものは唯哲學的の神を以て満足せず、必らず父なる神の信仰の必要なるを認むべしと雖も、子なる神の信仰の必要を承認せざるもの少からず、是れ一は宗教の歴史に明かならざるより起る誤謬たりと雖も、亦一は自己の宗教上經驗の乏しきに基すといはざるべからず、試に思へ己の荏弱なるを悟るもの、如何で最高き處に在す神に見ゆるを得ん、己の罪惡を思ふもの、如何で至聖至善なる神に近くとを得ん、罪人なる人類には子の神の信仰必要なり、子なる神、人と成つて人間に降り、神人の媒となり給ふ、之に因て罪惡の觀念ある吾人も憚りして至聖至善なる神に近くとを得、子の神、肉體を取つて人となり吾人の荏弱を軀恤り給ふ、是に於て乎、吾人は憚らず神の前に出て、吾人の一切の試と心配をも明かに白狀するを得るなり、子なる神存するとなくん

ば吾人は罪人として、荏弱なる人類として、神の前に出るとを得ず、又神に依て誠の安心を得ざるなり、されば子なる神キリストの存在は、吾人の實驗に適合するものと云はざるべからず、世に父なる神の觀念を以て充分なりと爲すものあれど、多くは己に宗教上の經驗を踏まざるの人なり、苟も正當なる宗教上の經驗あるものは、理論は兎に角、實驗上より子なる神の存在を否むこと能はざるべし、

昔イスラエルの民屢偶像教に陥らんとせしも、亦古今世界に於て偶像教の勢力甚だ盛なるも、畢竟人心に人類的の神を要する眞理を證明するに過ぎざるなり、人は單純なる一神教を以て満足するものにあらず、偶像教の無道理なる人々之を悟らざるにあらず、然れども尙偶像教に傾くの勢あるは、是れ單純の神は以て人心を満足せしむるに足らざるを證するなり、神の吾人の爲に人となり吾人の仲保となり給ふ、是れこ



の不滿を充すべき真理にして、吾人はキリストに於て、偶像教に於ても尙満足し得ざる所の必要を充すを知る、偶像教の勢力ある所以、他にも原因あるべしと雖も、其一原因は取て近づく可らざる畏るべき神を變じて、人の如きものとなし親むべきものと爲すに在りといはざるべからず、果して然らばキリストに於ける吾人の信仰は、此必要を最も能く充すものと云ふべし、子なる神は吾人の以て近づき以て親むべきの神なり、吾人宇宙の大主宰なる神にはモーセの如く畏れ慄きて、親むとを能くせざるべし、然れど子なる神には吾人の朋友とし兄弟とし同類として親み、如何に他人の前を憚る心中の秘事をも、子なる神には白狀するとを能すべし、子なる神の信仰は實に吾人罪人たる者に取て、缺くべからざるものなり、

三、聖靈なる神の信仰は吾人信仰の生活に決して缺くべからず、吾人

の神に於けるの信仰は兎角、超越的(Transcendental)に流るゝの弊あり、唯聖靈なる神の信仰あつて、神の普遍在(Emanent)なるを明に認むるを得、パウロが「我儕は彼に頼り生きまた動きまた存するとを得るなり」と云ひしは、此真理を指せるなり、吾人は神を見る能はず、又神の聲を聞く能はず、然れども神は常に我儕を觀、又我儕に語り給ふなり、吾人は神の中に住むのみならず、又神の聖靈我儕の心に住み給ふなり、吾人は神の宮殿なり、神の靈我心に在すなり、此信仰あるが故に其心清淨なるを得、吾人神を信すと雖も、神吾人の心に住み給ふとを信するに非んば、如何で真正の慰藉を得るを得ん、吾人キリストを信すと雖も、彼の聖靈と俱に我儕に來つて、吾人の心に宿り給ふとを信するに非んば、如何でキリストの感化を吾人の心に全ふするを得ん、キリスト聖靈に就て左の如く宣へり、曰く「彼來らんとし、罪に就き義に就き審判につき世をして罪あ



## 三位一體の説

りと悟らせん又曰く、彼即ち真理の聖靈の來らんとし爾等を導きて凡の真理を知らしむへしと、吾人が罪の感覺を得るも、宗教上の真理を確知するも、聖靈の働に歸せざるを得ず、吾人は之を一身の實驗に徴して眞に然るを知るなり、聖靈なる神の信仰は吾人の實驗に適應するを覺ゆるなり、

三位一體の教理は、一方に於て神に關する吾人の觀念を完備せしむるのみならず、他の一方に於ては基督教の活氣を維持するに欠く可らざるを知る、現今我が日本の教會に於ては、動もすれば此教理を輕じ、之を以て幾ど信者の生活に關係なきが如く視做せども、此は大なる誤と爲さる可らず、古今何れの國に於ても、此教理を放擲したる教會に於て、活潑の信仰を維持したるものあるを見ざるなり、是れ豈に此教理の吾人實地の信仰に最も必要な確證にあらざして何ぞ、特に古代の師父

等が此教理の解説に最も力を用ひたるを思ひ、近世の神學者が之が解説に於て、最も深遠なる神の觀念を得んとするを見れば、此教理は理論に於ても最も精密なる攻究を要するを知るなり、

吾人は以上の論說に於て、決して三位一體の教理を満足に論じ盡したりと爲さず、然れども若し以上の論に説て、此教理の幾分を明にしたりとせば、吾人の望は達せりと云ふべし、今此論を結ぶに於て何をか云はん、唯パウロの言を記應するのみ曰く、

あゝ神の智と議の富は深かき其法度は測り難く其踪跡は索ね難し孰か主の心を知りし孰か彼と共に議ることをせしや孰か先づかれに施て其報を受んやそは萬物は彼より出でかれに倚かれに歸ればなり願くは世々榮神にあれアーメン、



9/35

明治二十六年十一月六日印刷  
明治二十六年十一月十日發行

版權所有

定價金貳拾錢  
郵稅金四錢

著者 小崎弘道

發行者 福永文之助  
東京々橋區出雲町一番地

印刷者 山本鉄次郎  
東京々橋區四辨屋町廿六番地

發行所 警醒社書店  
東京新橋出雲町一番地

印刷所 秀英舍  
東京々橋區西紺屋町廿六七番地

發賣所 福音社  
大阪四通土佐堀三丁目



小崎弘道 著 島田三郎 叙

徳富猪一郎 題

### 三政教新論

定價 金二十錢  
郵税共

第一章(緒論)改革の時代 第二章、我國政教思想 第三章、儒教の性質 第四章、儒教之利害(第一) 第五章、儒教の利害(第二)第六章、儒教用ゆ可らず 第七章、宗教道德の必要(第一) 第八章、宗教道德の必要 第九章、儒教と基督教 第十章、基督教と文明(第一) 第十一章、基督教と文明(第二) 第十二章、基督教と改良 第十三章、教會と政府 第十四章、一己人と社會(結論)

小崎弘道 著

### 再版 信仰之理由

定價 金十五錢

本書は左に前記の目次に従ひ著者此教を信する理由を記述せるものにして、世の道を求むる者に於て少補なくんばあらず

第一章 宗教總論 第二章 神の思想及其原因 第三章 神の存在 第四章 人類と神の存在 第六章 基督の神性 第七章 奇跡及其効用



小崎弘道著

## 再基督教と國家

定價金 六 錢

基督教が一般人心の上に及ぼす感化の勢力は早く世人の認知する所にして其實際到大用ありとの嘆辭は往々にして佛徒の口より出つ左れば今日に在て基督教に關する最終の疑問は唯だ「基督教の教義が國家に對する關係如何」にあり彼の無知なる異教者の譏毀し守舊的一派の學者の論難し、併せて誠實眞理を求むる未信者を其従ふ所に迷はしむるものも亦た唯だ此の一疑問に在るなり、今本書は著者が十餘年來の實歴に由て徧く是等の異論駁議を觀察し迫害の種類を辨斥し具に論者の唱ふる如く基督教の教義は國家に不忠なりや、國家を愛せざるや、不義にして鄉黨團結の力なきや不倫にして一家問族の親なきや、諸々是等の疑問解釋し得て甚だ明白なり僅々たる小冊子語る事詳なるを得ずと雖ども措辭皆な肯綮を得たり殊に著者の謹嚴なる態まゝに自家の意思に一任して放言高論することをなさず一段一節盡く聖經に基くを見れば實に基督教の解釋者として信憑するに餘あり信者は之を讀みますく國家的の觀念を養ひ自ら進んで此の日本國の濁氣を掃除すべく未信者は之を讀で最終の疑問決定し速に眞理の門戸に入ることを得ば獨り弊店の喜びのみならざるなり



70

216



